淪落の女

松崎天民著

272
602

始

特106
827

帝國圖書館藏

泣菫　薄田淳介氏にさゝぐ

大正
2. 3. 27
内交

口畫「淪落の女」　岡本一平
銘酒「淪落の女」　坂元雪鳥
人生の報告者よ　兒玉花外
淪落の女に就て　松崎天民
尾の道の情死者　喜多村綠郎
新聞記者の見た　正宗白鳥
一種の女性問題　宮田脩
男の罪、女の罪　綱島佳吉
彼等を救濟せよ　山室軍平
産婆の見た産婦　瀧田哲太郎

銘酒「淪落の女」

文學士　坂　元　雪　鳥

天民君足下。

君の名を始めて腦裡に印したのは、雜誌「小天地」であつたと思ふ。表紙に菜種の花か何か描いてあつた號で、君等が合宿所(?)解散の記事を讀んだ時、何といふ殺風景な生活をする人達だらうと酷く不思議に思はれた。僕は父母も兄弟も健在で、壹錢の金だつて自分で稼ぐ必要なしに子供らしい學生々活をやつて居た時分だから、君等に對して同情を表したといつても夫は極めて淺薄なものだつたに相違ない。寧ろ不快な話を聽いたといふ樣な氣分が强かつたと思ふ。夫がどういふ

譯か今も忘れられぬ印象を殘して居る。

其後久しい間、君に就いて新らしい印象を得ないで過したが、僕が新聞に關係してから「國民」に斯ういふ働き者が居るといふ話の中に、古い記臆を新にす可く君の名を發見した。然し其時は懷かしい名とは思はなかつた、無論早く逢つて見たいなどゝも考へなかつた。然るに偶然君の大眼玉に逢着したのは、大隈伯邸の園遊會場であつた。中内蝶二氏が鹿爪らしく紹介してくれたので互に挨拶を交はした事は、恐らく君の記臆にもあるだらう。其所には紅葉が散り布いて居たか、或は連翹が亂れて居たか判然と覺えないが、麥酒のコップと、ミス●バイオレットと洋字で印刷した小形の名刺とが卓上に在つた事は明らかに覺えて居る。其名刺を鼻で嗅く樣にして讀んでた君の姿から、僕は君が魁偉な顏に似ず鋭い感覺と饒かな興味を具有してる人である事を學び得た。名刺の主は若い聲で思切つた蓮葉な事を言つて居た。其言動を半は忌々しく半は面白く注目してた君の眼光から、僕は君が皮肉な觀察家で、同時に人懷こき温情の人である事を偸み見た。今から考へると彼の時の君は、今日淪落の女を描く可き運命を豫想せしむるに十分であつた。

君が「朝日」に來て机を並べてから、僕が其社を退く迄は餘り永い間ではなかつた。然し其短い間に君と相酌んだ事は割合に多かつた。大抵の點で君と僕とは別の人間であるらしいに拘らず、或點ではた互に迎合しない一致を見る事が出來た、賛否は別としてた互の談話は良く了解された。對手の言葉の終るを待たないで「左樣だ〳〵〳〵」と首肯

いて笑ふ事も多かつた。現在では二人の生活は隨分違つた種類に屬する、從つて習慣や趣味や或は性質なども益々遠く隔つて行つて居ると思ふ。然し君と逢へば今でも疎隔を感じない。多分君も君の生活圏から一二歩外へ出てくれるだらうが、僕も僕の生活圏から二三歩外へ出て逢ひに行く樣に思ふ。東京人と京都人とが、名古屋邊で會見するといふ格である。靜岡で逢つたり箱根で逢つたりする內には、時として横濱迄引張られたり或は大津迄引戻されたりするかも知れぬ、然し二人は東京で或は京都で飲む事は無さ相に思ふ。戀の男女は男の家でも女の家でも相逢ふ事はない、一方が裏口から潜り出ると一方は雨戸の隙を忍び出ねばならぬ。僕等は野合——アッ、左樣では無い、人に見られて耻かしい仲では無いが、た互の生活が毛色を別にしてるんだから己むを得ない、己むを得ないのぢアない、夫で結構だ、何時なんときでも會見地へ歩み寄る事を得るた互は幸福である。相手を自分の方に引込まうともせず、又押掛けて行かうともせぬた互は幸福である。

淪落の女は描いても淪落の男にはなり得さうもない男共である。

た互は東海道の名所々々、到る所で勝手な放談を永久に試みる幸運を持つて居る。ソウいふ場合にポケットからウキスキーの壜を取り出して、どうだい之はといふ樣に、君は今「淪落の女」を放り出して見せたのだ。其ウキスキーは必ずしもスコッチの芳烈なのでなくても快く酔へれば夫で宜い。マサカ地酒を持つて來る君でも無いから先づ一杯を注ぎ給へ、良い名では無いか銘酒「淪落の女」。

——大正元年、一一、八——

人生の報告者よ

兒玉花外

山青い美作の小村落を少壯で飛出して、今日東京に朝日新聞記者として活動する天民君は、所謂學校の閲歴なる物は持た無いだらう。が彼は、社會觀察の力と文筆とは天禀である、全く天才である。ゴルキーと同じく放浪と人生の苦味の中から、彼は此の恐るべき才を得た。

彼の稍肥滿したる潤澤の肉體、荒粗で且つ纎敏で切れる剃刀のやうな神經。肉感と精神とが何時も强烈に働くところは、ドウしても之は露西亞人的であつて、日本人の中にも血液と脂肪の多き南方人で、亦た現社會の新人の代表者であらう。

前屈みに歩く彼は常に天を仰がずして、地をのみ觀て居る。而して彼の鋭い直覺的の瞳には、光明よりも寧ろ暗黑面が映つて、社會の萬象が火よりも瞭かに一々躍映つて來る。――しかし、度の強い近眼鏡は毎に涙に曇るといふ事だ。

彼の觀察描寫の奇警、筆力の美は悉な自家の同情の美の閃めき、露の如き雫滴である。縱令ば、彼得意の闇中の『白粉の花』の描寫に見るも、如何に彼が痛烈慘澹の筆底、熱き同情の思を、悲しき儚き妖魔賤婦にも灑がるゝかを見よ。そして又、何れの方面にも彼の宗教理想の影が附纏つてゐる。

嗟吁、涙と熱と血に、社會の各所を織込む人生の報告者よ。吾は傍に在りて讃美謳歌の聲を吝まず。

彼は他日ヂッケンスに、モウパッサンに、或はゴルキーに行くか。大膽勁直な社會記者の天才よ！此の黑き赤き、力强き散文を綴る都會詩人よ！　予は其の前途を最も注意する一人なのである。

「淪落の女」に就て

一、「淪落の女」は明治四十五年二、三、六及び大正元年九、十一の各月に渉りて、雜誌「中央公論」に掲出したる、予が新聞記者生活中の副産物なり。

二、多忙なる新聞社の任務に從事して、僅に少閑ありし折々、唯、興味を中心として記述したるもの。取材に於ても、描寫に於ても、何等の新意無きは、當然の事のみ。

三、これを文學と云はんには、餘りに内容の不充實を笑はるべく、これを雜報と云はんには餘りに記述の主觀的なるを嘲けらるべし。小説に非ず、雜報に非ず、唯それ通信文か。

四、この書を公にするに方り、この書と因緣淺からざる五家の寄書、并に親友三家の序跋を得たるは、予の欣榮とする所。口繪と裝釘に就ても、畫家と發兌元に謝せざるべからず。

五、予はこの書の一部を、予が少年の恩友たりし薄田泣菫氏に献ずると共に、また五人の相知れる女達に、その一部をさゝげんとす。これ予にとりての淋しき慰籍なり。

青南樹下居の病室にて

著者

——大正一、一一、三〇、夜——

淪落の女

目次

一、黒縮緬の羽織……一
一、小村侯爵令孫の夜
二、亞鉛屋の二階にて
三、東京研究の新方法
四、新朝顔日記のお鶴
五、唯事で無い女の願
六、記者探訪者通信員
七、平凡な女の墮落史
八、「そら大きな石が」

二、捨ばちのお時……四五
一、プランタンの一夜

目次

二、廂髪に結た中年増
三、酒に語る過去現在
四、自暴自棄の表と裏
五、女から長文の手紙

三、お小夜の行方……七二

一、何所へ行つたらう
二、不得要領の日なり
三、お小夜であれかし
四、唯一の道は何ぞや
五、過去と現在と未來
六、痴ならずんば狂か
七、其の烏啼の夕暮に

四、さまよひの女……一〇七

一、政治文學を語る女
二、一夜泊の客に惚れ

三、落藉されて歸る所
四、其の一顰一笑の裏
五、凄慘な運命の縮圖
六、哀れ深い波の磯節
七、醜惡猛烈な腐肉團
八、男女混浴の自然觀
九、女性美か女性醜か
十、これ人生の一事實

五、十二階下の夜……一六一

一、未曾有の廓清運動
二、淺草雷門行の電車
三、よか樓と神谷バー
四、救世軍の山室樣に
五、聖書の背皮金文字
六、日蓮と基督の愛兒
七、探訪日記の中より

目次

八、恐しき私娼窟にて
九、淋しい觀音堂の裏
十、彼奴は新聞屋だよ
十一、燈火の巷暗黑の家
十二、お醫者さんが好き
十三、笑の中幕涙の大詰
十四、其の聲雀に似たり
十五、古郷近し齡老たり
十六、一千二百人の運命
十七、人生探訪者の感想
十八、戀を味ふ月日なし
十九、私娼窟に美人多し
二十、性慾濃費者の群よ

——目次、終——

淪落の女

松崎天民

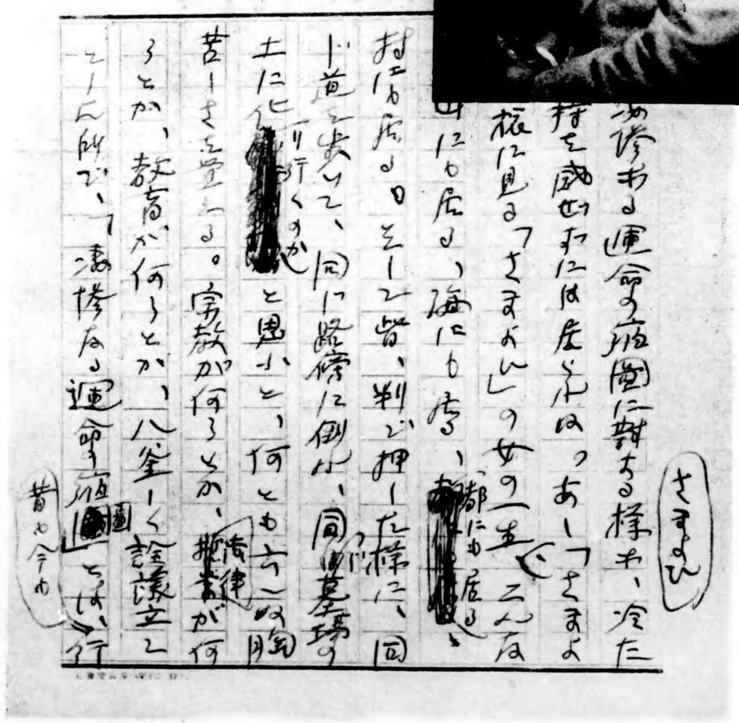
黑縮緬のお秋は何うしたらう、捨ばちのお時は何うしたらう、行方の知れないお小夜は何うしたであらう。山水十日の旅路に見た彼の女達は、この秋を何う暮して居るであらう。十二階下の闇路に見た、お艶や其の他の女達は、銀杏の葉落つる今日この頃を、何うして過して居るであらう。多忙い新聞記者の任務に、閑暇あつた折々、僅に相接し相語つた仲に過ぎぬけれど、私は「彼の女達」を忘れることが出來ない。あの顏、あの姿、あの言葉、あの涙を私は永久に忘れることが出來ない。

光ある世から遁れて、暗さより暗きに行く「淪落の人々」よ。さらば、幸無き生涯を微笑み給へ。

——大正一、一一、一〇、夜——

黒縮緬の羽織

著者と原稿



一、黒縮緬の羽織

一、小村侯爵終焉の夜

喜多村緑郎君　足下。

大阪の道頓堀で、芝居を演つて居る君へ、葉山に來た僕から、此の通信を送るのを、先づ何よりも興味有ることに思ふ。本郷座の樂屋で逢つた以來、最う彼れ是れ一年餘も無沙汰して居るが、君の動靜は、時折の演藝だよりで承知して居る。僕は相變らず、東京朝日新聞の三面――社會部――の一員として、其の日その日のお茶を濁して居る。お茶を濁して居ると云ふより他に、僕の思想やら生活やらに就いて、

君に報ずる何等の新聞も持つて居ない事を、僕は別に恥しく思はない、反つて、泰平無事で宜い位に心得て居る。——

葉山に來たのは、前の外務大臣侯爵小村壽太郎氏の病氣の經過やら、薨去の模様やらを、新聞社に通信すべき要務を帶びてゝある。ここへ來た三日目の朝、侯爵は終に薨去されたが、此の一大外交家の死と、僕との生涯の上には、相通じた何ものも無いけれど、僕に曉の星やら松吹く風の聲やら、寄せては返す男波女波の音やらを、大道具小道具に使つて、一段半九十行の悲し氣な記事を電話で送つた。可笑くも無いのに笑つて見せたり、悲くも無いのに泣いて見せたりするのは、俳優たる君の上にも、新聞記者たる僕の上にも、同じ程度で共通して居る。或る男や或る女に扮して、其の性格やら動作やらを活演する所に、

君の「藝術」が有るならば、時と場合と事件の性質に依つて、讀者の同感を強る樣な記事を書くのも、僕等の「芝居」と云ひたい。

今日は、其の一芝居を演つて、ホッと胸を撫で下した所である。舞臺に立つて、何千人かの觀客を前にしては、舞臺に人と爲つた君と雖も、種々の意味に於いて、多少の不安を感ぜずには居られまい。社長なり、編輯長なり、社會部長なり、同僚なりの他に、廿何萬と云ふ多數の讀者を前にして、日毎夜毎に何等かの事件を探訪し、何等かの雜報を書く僕等の上にも、實際、人知れぬ苦勞も有れば煩悶もある。殊に或る重大な事件を通信するために、東京市外の地に特派される場合には、不安の度も一層強くて激しい。事實そのものを事實有りの儘に見聞したか何うか、事件そのものを正當に理解し、公平に觀察したか

何うか。その上、他社の新聞と對照して、優越なる成績を傾したか何うか。社に歸つてから、「何社のが一番佳かつた、君のは何うも……」などゝ云はれはすまいか何うか。斯う數へ立て來れば、全く特派員はど心配の多いものは無い。幸にして豫定の旅費が少しは殘つて、敷島がロンドレスとなり、お刺身が鰻の蒲燒となり、田舍の惡酒が瓶詰の櫻正宗になる樣な事が有つても、此の心配と差引すれば、殘る所は九牛の一毛たるに過ぎない。

喜多村君足下、今夜は其の「九牛の一毛」を、各社の特派員が持寄つて、何所かで一杯飲まうと云ふ事になつた。長者園か、かぎ屋か、日蔭の茶屋か、御料理兼御旅館の他には、紳士らしく飲み得る所は無いと云ふが、宿の褞衣に羽織を重ねて、鳥打帽目深の連中には、曖昧屋

か蕎麥屋位が相應して居る。薄月夜の寒い十時過ぎ、五丁も十丁もある遠方へ行かずとも、「宿の近所に何か有り相なものだ」との動議も出た。但し宿の女中や亭主に就いて、夫れと明ら樣に尋ぬべき事ならず、「兎に角出かけやうぢやないか」と、土地不案内の三人は、郵便局前の宿屋を出た。

小村侯別莊の大混雜を思へば、眞に不謹愼の誹を免れないが、事實はさう注文通りに行かない。御用邸の前を歩きながら、一人が「仕事も今夜で一段落だ、少しは飲んだつて宜いだらう」と云ふと、「隨分、活動したからねえ」と、一人が冷笑する樣に云ふ。

東京より五度高いと云つても、夜の葉山に吹く風は、冷たくて手足に泌む。

二、亞鉛屋の二階にて

此の邊から逗子へ出る男女も、逗子驛から葉山、一色、三崎街道の村々へ歸る老若も、多くは乘合馬車の便に依つて居る。ピープー、ピープーと、一呼吸毎に細く長く響き渡る喇叭の音を聞くと、僅に半日程の土地でありながら、泌み〴〵と旅の心地がする。

僕等の上つた家は、そのガタ馬車の終點、御用邸の間を流るゝ一色川に沿つて、左へ入つた左側の亞鉛屋根である。「御料理三崎屋」と云ふ屋號は有つても、屋根が亞鉛、廂が亞鉛、外圍も垣も、皆亞鉛造りである所から、土地の者は亞鉛屋、亞鉛屋と呼で居る。蕎麥が出來るで無く、天麩羅を食はせるでも無いに、亞鉛屋には女が居ると見えて、

三崎節か何かを唄つて居る。

「三人……、宜いだらう」

「入つしやいまし、何うぞ、此方へ……」

上り口には、長火鉢が一つ、瓶詰の酒が十四五本、長い帳面や四角な帳簿が三五冊かけて有る。天井も黒く疊も黒く障子も黒い中に、手拭が一つ際立つて白く見える。帳場の傍には、村の百姓らしい男が三人、海苔か何かで、チビリ〳〵と遣つて居た。

案内されたは二階の六疊である。階下の恐しく煤氣て居るに反して、こゝは天井も障子も襖も新しく、十燭光の電燈さへ輝いて居る。襖の模樣が卵色の紅葉散しで、壁が濃鼠色、床の間には草花を投げ差しにしてあるが、額面も無いし軸物も懸けて無い。「春如海」とか、「豪氣堂

々」などの文句を、宜く斯うした飲食店で見掛けるものだが、こゝの家は心持が好いほど何も無い。三つ出した座蒲團も、黄八丈擬の木綿物で、三人の間に置かれたチャブ臺も、一枚板の何とかでは無い。唯十燭光だけが、不調和に振つて居る。

座蒲團が出て、チャブ臺が出て、莨盆が出るまでに、交る〳〵四人の女が顔を見せた。齢三十に近いのは縮れ毛の赤肥滿で、銀杏返しの根が崩れて居る。紡績絣の綿入にメリンスの地味な帶、半分木綿の入つたお召の前垂を掛けて、いやに氣取る癖がある。

「お誂へは？」

「何も入らない、酒、海苔か、林檎で……」

「他には、別に？あの……」

「他に何が出來る？」

「さうね、鷄卵、おさし、牛、とり……」

「卵でも持つておいで、半熟にしてね」

「かしこまりました」

喜多村君足下、僕等のチャブ臺に、櫻正宗の二合瓶が立ち、林檎やら海苔やらが並べられたのは、夫れから二十分も經て後である。こゝの娘分だと云ふ十八九の、廂に結つた丸顔の背の低い女が、主として僕等のお酌をしたが、白粉をコテ〳〵塗つて居る上に、大きな井桁絣の綿入を着て、鐵色襦子の腹合せ帶の間から、眞紅な帶揚を出して居る所は、可憐に見えるべき筈であるに、少しも僕等の同情を惹かない。初めて逢つた客人でありながら、半年も一年も馴染になつて居る男の

様に心得て、蓮葉な身のこなしをする所など、「この家の娘分」が聞いて呆れる。

「れ唄いなさいよ、何か。貴郎がた東京？、横濱？、さうね、何商賣の方か知ら……」

「電信の技手か、工夫の親方か……はゝゝ」

「御戯談もんでせう。官吏か會社員、月給ならば二十五圓以上の方……、でせう」

「馬鹿、これでも皆、年俸千圓以上の奏任官の同等官の待遇官の樣々なんだよ」

「かん、かん、かんの、のゥえですか」

「こんなつまらない問答をしながら、盃を乾すのは眞に詰らない。廂

髪は「何か唄ひませう、ね」と品をつくつて、眼を細くして、

「千葉で生れェて、東京で迷ひィ……、今ぢや葉山で酌婦すゥる、ぱッぱッ」

と小聲で唄ふ。齡よりは老けた濁音が、際立つて耳に障る。夫れでも本人は平氣なもので、

「ちよいと、巧いでせう」

最う、逗子通いの馬車の音聞えず、階下でサノサ節を唄つて居た客も歸つたと見えて、騒の聲が聞えなくなつた。小村さんの別莊では、夫れ電話、それ電報と騒いで居るだらうに、と、何かにつけて、未だ「小村」の事が頭を去らない。

三、東京研究の新方法

事實を白狀すると、僕はこんな所へ來たく無かつた。單に酒を飲み美味い物を食はんとするには、亞鉛屋は餘に貧弱である。綺麗な座敷で、より美しい女を相手にして、より美味い酒、より美味い物を食はうとするには、長者園あり、日蔭の茶屋あり、何を好んでか、亞鉛屋などへ來る必要があらうぞ。

然し、こゝへ來たに就ては、他の人達は知らず、僕一人にとつては夫れ相應の理由がある。忘れもしない今年の夏、社の同僚渡邊鶴峰君が、埼玉、群馬、千葉地方を巡遊して歸社するや、一夕、南鍋町の喜仙で晩飯を食つた事がある。僕等親しい同僚の間にあつては、社用を

帶びて地方へ出張し、三日なり五日なり滯在して歸京すると、取敢ず手近の何所かで會食するのを例として居る。そして、新聞に書れない旅中の見聞、大きな聲では云はれない旅中の珍談を、互に語つたり聽いたりして、與じ合ふのを常として居る。その日も鶴峰は例の調子で、ズボンの隱囊へ兩手を突込だ儘、直立不動の姿勢になつて、

「たい、松崎、飲まう、珍談があるぞ」

と、膀を一二度突き出して誘ふ。凡そ飲むことゝ食ふことに於ては、誘はれて否むべき僕に非ず。殊に「珍談」の一句に心動いて、喜仙は奥二階の四疊半に、二人相對して、しやもの鍋をつゝき初めた。

渡邊君の珍談は、眞に面白い珍談であるが、新聞に書かれないと同じ樣に、ここにも明ら樣に云ふ事の出來ないのを殘念に思ふ。彼は珍

談の始終を語つた後、その珍談の女主人公とも云ふべき、田舍の宿屋の女中、地方の飲食店の酌婦に依つて、現代の東京を側面から研究して見ては何うか、と言葉を改めた。

「全體、東京と云ふ都會は君、地方人の集合なんだらう。地方人の東京が、地方から出て來る弱い女を苛責めて、散々墮落させた揚句は、トツトと前の地方へ放り出して了う。實に不都合ぢやないか、不都合だよ……。田舍へ落魄して居る女の話を聽いて見ると、なか〳〵面白い事がある。妾は麹町の何々家に奉公して居ました、と云ふ奴があるかと思ふと、妾は公園で褄を取つて居ました、と云ふ婆が居る。それが君、皆、變な宿屋の女中になつたり、飲食店の達磨に落魄たりして、五十錢か一圓なら大威張なんだらう、實に驚いて了う

よ。こんな女の話を聞て、其のまゝ書いても、立派な一つの文章になる。東京と云ふ大きな都會の暗黒面が、常に何う云ふ事をして居るか、東京に居て調ぶるよりは、地方へ出て、宿屋の二階の夕暮の窓の下か何かで、女の話をジツと聞いて居る方が、反つて東京の一面を明瞭と浮み出させる。俺ア、此奴を君が書くと面白いと思ふがなア」

「面白い、好い事を聞いた。社の新聞に續物としては少し何だけれど、書き樣一つでは物になるよ。全體、女は嘘を云ふ事が上手だが、殊に田舍何かで、妾は東京に居た事があるのよと、「東京」を鼻の端にぶら下げて居る類の……白粉の女などと來ては、小説家以上に創作的技倆を持つて居る。自分で自分の經歴に、色彩を施す畫家の術も

心得て居れば、自分で自分の過ぎ來し方を批評する批評家の態度も辨明へて居る。要するに女は一種の藝術家？で、語ること總てを信用する譯には行かないが、東京研究の新方法として、頗る面白い思ひ付だと思ふ。書かう、屹度、書く、新聞か、雜誌へ」

喜多村君足下、僕が此の亞鉛屋に來たのは、實に斯うしたヒントを得て居たのに因る。何時か機會が有つたならば、斯る類の女を訪問するために、二三の地方を旅行して見たいとも思つて居たが、果さずして、今年も暮れなんとする際、隅々小村侯の危篤は、久しく旅行に渴して居た僕をして、此の地に急行せしむるに至つた。東京から半日程の東京臭い葉山に來て、この腹中の末定稿を滿足させるだけの材料を得やうとは、先刻迄も豫期しなかつたが、「赤肥滿」のすまし方と云ひ、

「廂髪」のぱッぱ節と云ひ、何うやら此家の女には、「東京の影」が讀めさうな氣持がする。

問ふ勿れ、海苔や林檎や牛などで、酒ばかり飲ませる家では無い。何の女も鬢がほつれて、何の女も襟の白粉が剝げて居る——。

四、新朝顏日記のお鶴

た銚子のた代を持つて、また一人の女が上つて來た。黑襟のかゝつた双子縞の筒袖を着て、銘仙絣の前掛した二十六七の束ね髪。

「皆さん、すまアして居らッしやるのね。今の唄はた時さん？、漸と歸して了つたから、ゆつくり召し上れよ、閣下幷に諸君……」

束ね髪の女は一寸右手を上げて、「失敬」の形をしたかと思ふと、直

ぐトン〳〵と下りて行く。大分醉つて居ると見えて、裙さばきもだらしなや。

三人の髭男が、五本の櫻正宗を倒しても、醉はなかなかに發しない。入交り立交り來る女も手傳つて、隨分飲んだ樣であるが、レッテルだけの「攝州灘」では、宛然水を飲む樣で、落花狼籍など思も寄らず。

齡よりはませて居る廂髪を捉へて、

「君達は、全體、何をする人なんだ」

と、わざと奇問を發して見ると、女は平氣で、

「酌婦、娼賣ぢやなくてよ」

と、兩手を膝の上にのせて、突き襟をする。

この時、莨盃を持つて出た以來、一度も顏を見せなかつた、他の女

が上つて來た。

「厭になつて了うよ、ね時さん。人を犬か猫の樣に思ひあがつて、三十錢なんするから、云ふことを聞けと云ふのよ。妾最う腹が立つて腹が立つて……何うして遣らうかと思つたけれど、やつぱり弱い商賣だわねえ。誤間化して歸した事は歸したんですが、妾つく〳〵厭になッちまう……」

ね時と呼ばれた廂髪は、「御馳走樣」と云つた限り、頭から相手にしない。そして、

「ね秋さん、ね酌でもねしよ。ねえ、皆さん」

と、妙に媚びる樣な態度をした。

根の低い銀杏返しに、狹い額の生え際濃く、程ケンの有る眼に霑を

帶びて、小い引締つた口許に、淋しさが漾つて居る。色の白いのが上氣して、憔けた兩頰に鬢の毛の亂れかゝつた風情は、愛嬌にこそ乏しけれ、男の心を引付ける力は充分ある。紺色がゝつた絣の錦仙を着て、色の褪めた黒縮緬の羽織を重ね、左の薬指には、赤石の入つた金色の指環を箝めて居る。二十三か、四か、六とは老つて居まい。

喜多村君足下、これが僕の眼に映じたた秋の容貌と風姿である。口を利かしては、いけぞんざいな風があつて、うき世の荒波に漂ふこと五年を出ずして、早く既に身を捨ばちに持崩した女の樣にも思へるが、默つて伏し目勝に座つて居る所を見ると、何となく「物を思はせる女」である。何所かで其の顏を見た女——何所かで其の聲を聞いた女——何所かで一所に泣いた事の有る女——の樣な氣持もする。僕は最近三

五年間、新聞記者として接觸した世間の各方面に、此のお秋に似た女を求めて、其の一を去年の秋、上野の文部省展覽會に出て居た、なにがしの油繪「白粉の女」に得た。その二を三年前の夏、新富座に於て演じた伊井蓉峰君と君の「新朝顏日記」に得た。「新朝顏日記」の女主人公とも云ふべき、君の扮した「お鶴」に得たことを、特に君に向つて、感謝したいと思ふ。

「白粉の女」は、白粉をコテ〳〵塗つた女が、顏だけを正面に向けて居た樣に記臆する。繪の巧拙、色が何うで形が何うとか、氣分が何うで構想が何うとか云ふ樣な事は、僕の關り知る所でないが、僕は一も二もなく彼の顏が氣に入つた。白粉に荒れた皮膚の色、男に疲勞れた眼の表情を見て、僕は何となく「人生の痛苦」を讀む樣な氣持がした。

「白粉の女」がお秋か、お秋が「白粉の女」か、此の二個の間には、「空想」と「實在」の差別こそあれ、神祕の糸あつて、彼と是とを不卽不離の間に、繰つて居る樣な氣持もした。

若し夫れ、君の「お鶴」に至つては、お秋と交渉することの何ぞ淺からざる。僕が、何所かで其の聲を聞いた女、何所かで一所に泣いた女と思つたは、實に、君の「お鶴」に於てゞある。畫面に見えた「白粉の女」よりも、より現在的に、より實感的に、「お鶴」は僕の心を刺戟した。そこが「繪畫」と「劇」との藝術的生命、藝術的價値に、長短の差、大小の別有る所以など、言ふ可からず。僕は僕一人の趣味性を以てして、君の「お鶴」とお秋との間に、共通した「人生」を讀まんとするものである。

此の愚なる一文を、先づ俳優たる君に向つて送るの旨意も、愚ならざる君の合點し、寛容して呉れる所だと信ずる。

五、唯事で無い女の願

喜多村君足下、其の夜に於ける光景は、最う此の上細叙する必要が無い。同行の特派員達は、お秋が座席に侍つてから間もなく、皆、宿屋へ引揚げた。僕も一所に立歸るべきであるが、此の場の大詰を見たい爲ばかりに、夜更くるまで二階にとゞまつた。

實を云ふと、此の通信は、序幕も無く大詰も無く、山も無く正念場も無い。芝居の生活に一生を捧げて居る君が見ては、眞に物足りない單純なものかも知れぬ。然し、「お鶴」とお秋との間に、免れぬ因緣が

有る樣に、君と僕とも十年の知己である。「何だ、芝居にもならない女の話なんかして、最少し愉快な話でも聞かせ給へ」と云つても、忙しい僕の境涯に在つては、此の位の事を書くのでも、並大抵の仕事ではない。夫れに、明日は何うあつても東京へ歸らねばならぬ。急いで、後を續けやう。

お秋に於ける第一印象は、云ふまでもなく「お鶴」である。新富座の東棧敷で、初めて彼の「新朝顏日記」を見てより、今日まで忘れ得ぬ感銘を刻まれたのは、伊井君の扮した青年が、君の「お鶴」の許へ尋ねて來る條である。伊井君は洋服に麥稈帽(?)、窶れた姿をして「お鶴」に逢ひ、樣々の事を云つた樣であるが、頭に殘つて居るのは、彼の時に於ける「お鶴」の態度だけである。——銀杏返しに結つた二十二四(?)

左手を突いて身を斜に横へ、羽織の襟が半分すべつて居るのも頓着せず、伊井君の顏を左の横手から窺き上げる樣にして、右手に敷島か何かの吸ひかけを持つて居た。——彼の刹那の態度だけは、今も尙、明瞭に憶ひ起す事が出來る。或る意味に於けるお秋との初對面は、其の時を以て手帖の第一ページとしたい。

君の「お鶴」は、種々の意味に於て、樣々の事を思はせる女であつた。世路幾變轉、流れ〳〵て「白粉の群」に墮ちた女性の代表的描寫としても、意義あり生命あるものであつた。身を捨ばちに持くづすには、未だ三五年の苦い經驗を要すべき齡ごろで有りながら、彼の女は、身分も、富貴も、名譽も、戀も、凡ての榮ある「過去」を葬つて居た。伊原青々園君の「新朝顏日記」一篇は、何んな事件を描いたものか、其の筋

の一端さへも覺えて居ないけれど、「木鶴」の彼の時の活きた態度だけは、今に至るも忘れる事が出來ない。彼の時幕が閉るや否、僕は樂屋に君の部屋を訪ひ、唐突に君の手を握つて、二三度振り、

「佳かつた、佳かつた、實に佳かつた」

と云ふと、君は鬘を脱らせながら、笑つて、

「彼の捲莨がねえ、考へたでせう」

と云つた事を覺えて居るであらう。苦心の果の産物か、不用意の間の所得か、藝談に豐富な君から、彼の描寫に就ての由來を聞かなかつた事は、僕の甚だ遺憾とする所である。藝妓や、娼妓や、女中などを舞臺に見ることは、進歩遲々たる新派の劇界に於て、別に珍しい事でも何でもないが、斯うした女——銘酒屋の女——飲食店の女——揚弓店

の女——新聞縱覽所の女——を活躍せる舞臺に見たことは、世間は知らず、僕一人に於ては、彼の當時少からず異色とした所である。

れ秋が眞に夫れである。他の人達が歸ると、彼の女は二階に上つて來て、チャブ臺を中央にして、僕と相對して座つた。他の女は、氣を利かした積でゞもあるのか、それからは一度も顏を見せなんだ。角火鉢の火は半灰になつて、寒さが室の四隅から迫る。

「小村さんが、れ蕊れ遊ばしたんですッて、ね。貴郎がた、その御用で入した新聞屋さんなんでせう。階下では横濱から入した、電信の方と思つてる樣ですが、妾、眼があつてよ、チャンと、ね、さうでせう」

女は突然、斯う云つて、淋しく笑いながら、僕の顏を見詰めた。僕は

微醉に紛らして、

「新聞記者なものか、二十五圓以上の官員樣なんださうな、新聞屋なものかい」

と答へたけれど、實際、た秋の烱眼には驚いた。

「嘘、嘘、嘘、新聞屋さんだつて宜いぢやありませんか。貴郎が東京の新聞社の方ならば、妾、折入つてお願する事ありますのよ……」

た秋は斯う云つて、居ずまゐを正した。彼が願と云ふのは、別れた情人の行方を搜すのか、四散した父母兄妹の所在を求めるのか、何れにしても唯事で無い。

た秋も、唯事で無い樣な顏をして居る。

六、記者探訪者通信員

聞いて見ると、た秋の願と云ふのは、戀人の行方を搜す樣な、浮いた沙汰でも無いし、また親同腹の所在を求める程の單純な事柄でも無い。彼の女が、色の褪めた黑縮緬の羽織寒む氣に、小一時間も物語つたのは、浮沈變轉極り無い其の半生の身の上であつた。

喜多村君足下、これを感慨的の言葉で記せば、葉山の曉に星一つ飛んで、侯爵小村永久の眼に就いた其の夜、所も同じ葉山の飲食店の二階で、斯うした女の過ぎ來し方を聞くとは、何と云ふ廻り合せ、何と云ふ對照であらう。女は始終伏し目勝に、しんみりとした低い聲で、自分の身の上から自分の周圍、その身の上に生じた波瀾曲折、その周圍

に起つた様々の事件を、書けば其のまゝ文章にでもなる様に、順序正しく物語つた。そして最後に、

「今の話ね、何も彼も詳しく續物か小説かに書いで下さいな。それで最う妾、思ひ殘すこと無いのです」

と云つて、左の肩を淋しく落した。

僕は一寸考へた。考へるまでも無く、新聞記者は、何所までも新聞記者であるべき筈である。そして、新聞記者に閑散な月日は無い、——こんな女の身の上話なんか聞いて、小説の眞似見たいなものを書く様な、——そんな閑散な月日は無い。それも、新聞の三面材料になる様に、面白い人物と複雜した事件だけを拾つて、他は捨てられても、悔いないだけの覺悟があれば、書き様一つでものになる場合もあるが、

唯、女の一生を細々と書いたつて、其處に何の興味があらう、其所に何の生命があらう。それだのに女は、「殘らず書いて下さい」と云ふ。

「俺はた前の拙察通り、東京の新聞記者だ」と、未だ白狀もしないのに、女は新聞記者と看破して了つて、平氣な面付をしながら、

「貴郎は記者？探訪者？通信者？」

と、世にも小生意氣な質問を浴せ掛ける。

記者であらうが、探訪者であらうが、通信員であらうが、嚴密に云つて其所に何の差別があらう。僕は明治三十三年の夏、齡二十三歳にして、初めて大阪で記者と爲つた當時より、探訪＝卽＝記者論を主張した一人である。當時、文藝雜誌「小天地」に、僕は「新聞社の探訪」と題して、僕が記者になつた經路やら、初めて探訪に從事した所感やら

を書いたが、其の中にこんな一節がある。

日本の新聞事業は未だ幼稚なもので、探訪員の取つて來た材料を、内勤記者が筆の端で事を誇大にしたり、又は其の材料の生命とも云ふべき所を抹殺して了ふ事がある。自分は密に思ふ、今後三年五年と追々新聞事業の發達するに從つて、今までの無學な探訪員は陶汰されて了ひ、更に内勤記者が探訪に出掛けて、自分で材料を取り、自分で文章を書く樣になるに違ひない。

其の後十年の星霜を經て、新聞界、殊に昔の三面記事——今の社會記事——は、實に驚くべき長足の進歩をした。取材の範圍も擴張されて來たし、觀察の方法も警拔になつて來たし、描寫の樣式も嶄新になつて來たし、報道の速度も急劇になつて來た。此の他、活字使用上の

苦心、繪畫、寫眞版の應用、二十二字詰の六段が十九字詰の七段となり、十九字詰の七段が十八字詰の八段となつたなど、編輯の體裁上にも大革命があつた。一部の新聞批評家は、最近新聞界の傾向を見て、黄色新聞の色調を帶びて來た悲しむべき現象の樣に論ずるさうだが、僕等當事者の側から見れば、强ち左樣とのみも云へない。兎に角、新聞界多事多忙の十年間を、最も多事多忙な社會部に、最も多事多忙に送つて來た僕は、此の進歩發達の歴史を憶ふ毎に、一種快心の微笑を禁ずる事が出來ない。

そこへ其の「貴郎は記者、探訪者、通信者」と來た。た人の好い僕と雖も、多少面食はざるを得ない。

「記者もする、探訪もする、通信もする、編輯もする、僕はエラい新

聞屋なんだよ」

笑ひながら斯う答へて遣ると、お秋は如何にも安心した様な顔をして、

「だから、貴郎をた見掛けしてた願したんです。東京へた歸りでしたら、屹度書いて遣つて下さいな」

と、まるで他人の事でも頼む様に云ふ。

色香の衰退を見るには、未だ早い齡ごろながら、「淪落の影」は深く濃く、既に其の全身に沁みて居るやう。た秋はさうした女である。

七、平凡な女の墮落史

お秋の話は長かつた。上州の大百姓に三女と生れて、今年二十四歳の秋の暮、葉山の亞鉛屋に酌婦となるまで、二十四年間の日記のペー

ヂは、一枚〳〵生命がある。或る所は血で彩られ、或る所は涙でにじみ、或る所は戀の甘酒、或る所は苦悶の叫び、拙い活動寫眞を見るよりは、面白くて興趣がある。

三歳の夏から繼母の膝に育てられて、鰕茶の袴を穿いた十六の春、何うしたはづみであつたらう、男の肌の溫味を知つた。それからと云ふものは、家に居ても面白くなし、狹い村中に評判は立つ、何處へ行つても日は照ると、一人旅に立つたが十七歳。十八、十九と三年の間は眞面目になり、東京の然る大家にた小間使に上つたが、旦那様と云ふのが變な方で、何時しかた手がついて大騒ぎ、何も彼も妾自身が惡いとは知つて居ても、思へば東京は恐しい都會である。宿屋の女中にもなり、待合の女中にもなり、果は「蠣殼町」から「濱町」の夜に、「暗黒

の花」と咲いて、男を欺す氣にもなつた、男を嘲る氣にもなつた。——と、た秋は眼をかゞやかした。

今は最う衰へ行く身の末を案じるばかりで、新しい戀に泣いて見たい望もなく、人妻になつて手鍋提げやうとの願も無い。人の顏の見えない山奥にでも入つて、死ぬるを待つが定命の樣な氣持もする。然し女は何處までも女である、道に外れた快樂に娘盛りを送つた悔恨、人妻にもなり得ずして二十四歳を送る懊惱は、人一倍心を苦しめる。蠣殼町で「パイカラた秋」の名を謳はれて居た頃には、代議士のなにがし、小說家のそれがし、歌舞伎座のくれがしなどゝも馴染になつた。相場師の然る旦那には、特別の恩顧を受け、面白可笑しい月日を送つたが、今から思へば、能くも身體が續いたことゝ驚かれる。相手が八さんや

熊さんの印袢纏でなく、金緣眼鏡、髭、洋服、横文字の新聞や雜誌などを讀む人達とて、妾の方でも好い氣になり、自分の境涯の悲慘さを反省る暇もなく、幾年かを夢に過した。泣いたつて叫いたつて、その幾年は、最う取返す事が出來ない。——と、た秋は唇を噛みしめた。

喜多村君足下、女子大學が出來て、女の敎育も盛になつて來たさうな。婦人に關する種々の研究家が出て、婦人に關する樣々の本や雜誌も出版されるさうな。耶蘇敎の會堂では、日曜毎に女の讃美歌が聞ゐるし、救世軍では鐘や太鼓を鳴らして、墮落した女を救つて居るさうな。けれども「濱町」は救はれない、「蠣殼町」は祝福されない。況して東京を一歩出た埼玉、群馬、栃木、茨城、千葉、神奈川の村々に、「酌婦」となり「達磨」となつて居る女達に、何の交渉する所があらう。

婦人矯風會とか公娼制度廢止何とか會とか、名前だけは立派なものがあつて、一通りは神妙な運動を遣つて居る樣であるが、斯うした女の存在は、其の根ざす所極めて深く、且つ極めて遠い。崇高なる宗教、權威ある教育の力を以てするも、これを根絶するは容易の業で無い。僕はれ秋の過ぎ來し方を見て、今更の樣に、世上、神を傳へ道を說く者の云ふ所、眞に易々たる風あるに驚く。其處へ來ると、君の描寫した「お鶴」の如きは、人をして直ちに此の種女の運命を瞑想せしめ、其の生涯を想像させる所に、言外無量の味がある。やはり、說敎よりは芝居の方が、人情に觸れて居ると見える、人の心を動かすと見える。

東京を一歩離れた土地で、東京に居た人と逢ひ、「東京」の事を話し合ふと、東京に居て東京を見るよりは、より純正な客觀的の態度で、

東京を觀る事が出來る。東京に居て活動して居る日夜の僕までが、大きな舞臺の仕出し役者然たる姿に見えて來る。れ秋の話はお秋自身を中心とした經歷談に過ぎないが、東京と云ふ暗黑面の多い大都會が、こんな類の女を呑吐して、常に何んな事をして居るか、彼の女の身の上話を通じて、僕は東京の現代相に觸れた樣な氣持がした。東京に居ては左樣でもないが、一歩、旅へでも出て顧眄ると、東京は實に「恐い都」である。

れ秋の話は、要するに、平凡なる女の墮落史であつた。書けば——小說的に書けば——三十ページにも及び相であるが、僕には左樣した根氣が無い。書いた所で、小說や芝居以上の面白味が有る譯でもないに、下手の長談議は最う止めやう。

八、「そら大きな石が」

喜多村君足下、た秋に別れて、亞鉛屋を出て、宿屋に歸つて、こゝまで書いて來たら、洋燈の石油が盡きさうになつた。——亞鉛屋の二階は電氣でも、宿屋は別宅になつて居るので、未だ洋燈を使つて居る——何と云ふ不景氣な事だらう。夫れに眠くもなつた、今まで何を書いたやら、自分でも判らない。

亞鉛屋を出る時、た秋は寒くて暗いのも厭はず、御用邸の門前まで送つて來た。

「遲くなッたわねね。他の方が、變に疑るかも知れませんよ。惚れ合つた仲でも何でも無いけれど、何だか變ですこと。葉山なんか、當

分入つしやること無いでせう、入つしやらなくても好いから、書くだけは是非何かに書いて下さいな。黒縮緬の女、黒縮緬日記、黒き女、題は何とでも……」

「あゝ、書けたら書かう、黒縮緬が好いねね。色の褪めた黒縮緬の羽織、これは少し長過ぎる。葉山の女、た秋、これは大に露骨過ぎる。まア僕に任しとくさ。君の身の上だけを書かずに、君に逢つて別れるまでの事を、面白く書くのも一つの方法だ」

「さうでせうか、何とでも宜いから、屹度た願してよ。それを妾拜見して、他人の事の樣に讀んで、泣いたり笑つたりして見たいと思つて居ますの……。變な道樂ね」

門の前で、二人は何人かに憚る樣に、冷たい手を握り交した。暗き葉

山の夜にも、神見そなはすかと思つたので無い。唯、何となく憚られたのである。

「左様なら、御機嫌よろしく、れ氣をれ付けなさいまし。そら大きな石が……、ほゝゝ、左様なら」

先づ姿が隱れて、其の聲も闇に消えた。殿下在さゞる御用邸は寂として、唯、松吹く風と波の音のみ、葉山の夜に響き渡る。

君の「れ鶴」は、様々の事を思はせる女であつたが、れ秋も斯うして別れて見れば、逢ひ見て語る時よりも、しゝみりとした女である。男でも女でも、眼の前相見て相語つては、何等の感銘も殘さないのに、別れると妙に心をそゝる類の者がある。僕は此の種の人を常に「思ひ出の人々」と呼んで居るが、お秋も確に「思ひ出の女」である。思ひ出

にだけでも宜い、一度逢つた限りで、その人に深い印象を殘す者は、男にしろ女にしろ、何所かに鋭い所があるに違ひない。殊に日々夜々各種各方面の男女に接して、新聞の材料を取つて居る僕等多忙な新聞記者に、場合は違ふが、僅半夜の初對面で、忘れ難い或るものを殘したれ秋の如きは、人をチャームする異常の力を持つて居たに違ひない。彼の女も亦、一種の魔物か。

君の芝居、君の女形、君の「れ鶴」は、君が健在である限り、何時でもこれを舞臺に見る事が出來るけれど、れ秋には最う逢ふ機會がまい。「貴郎に、これだけのれ話したから、妾最うこゝには居ません、居られなく爲るかも知れません」と云つた様に覺えて居る。「思ひ出の女」として、れ秋は此の後幾年の間、僕の頭に浮むであらう、僕の物

語の材料になるであらう。別れ際に云つた頓興な、「そら大きな石が……」が、彼の女を記憶するに宜い最後の言葉となつた。あゝ、「そら大きな石が……」考へて見れば、僕等の前にも、君等の前にも、常に大きな石が轉んで居る——。

いよ〳〵石油が盡きて來た。未だ書きたいことも澤山あるが、これで止めやう。變なものになつて了つたが、君だけは多少の興味を以て、君と僕とに共通した特種の興味を以て、讀んでくれる事だと信ずる。

終に臨んで、遙に、君の健康を祈る。（葉山の宿屋にて）

——四五、一、記——

尾の道の情死者

大正四十一年十二月十二日夜

橋場の片隅にて

喜多村綠郎

天民兄。

明治四十一年、十一月二十三日の朝。尾の道の海岸へ、扱帶で括り合つた男女の死骸が打ち揚げられた。

其二人は前の日に、附近の寺へ戒名をうけに來た者と言ふ事が知れると。此が京の祇園の花と唄はれた、古川のマル子であるといふ事も判明つた。

男は、田中といふ紙屋の主人で、大分古い馴染の客なのだ。その時マル子は二十三であつた。

『幾ら腹が立つて居ても、顔を見ると怒れなくなる』と、彼女を知る人は皆いつた程、彼女の瞳は人を引附る媚を持つて居た。而し彼女は容姿の妖艶だといふ事とともに、頗る多情であるといふのも、新地の評判となつて居た。

十四五の舞子時代に、思ひ染めた初戀の男が片岡我童であつた。さうして此戀が深く心に刻まれた。果敢い首尾でも樂みに甘い戀に醉て居たのは僅かの間で、二人の自由もさう永くは保たれなかつた。最初は相思であつたのは言ふまでもないが、彼女一人の戀に生る程、夫れ程男の胸は狹くはなかつた。

苦しい戀に悶へながら、マル子も既に襟かへをして藝者になつた。其間に男は多くの女を知つた。マル子はそれを默つて觀て居るやうな弱いものではなかつた。男が女を獲れば、女も反抗的に男を他に求める、斯の如くにして二人の間にはいつしか溝渠が出來てきた。

けれども、女は男を忘れる事はできなかつた。却つて恁うなると情熱は一層燃えあがつて來た。

人の戀といふと、親の敵でも探すやうに騷ぎ立てるのが、猜の多い此廓の習慣であつた。彼女もその渦まきの中にまき込れた。

其處で母親が、二十五まで眞面目に稼いだら、男の許へ立派に嫁入らせるといふ口實のもとに、ていよく此戀を堰く事となつた。

さうなると切てと思ふ消息さへ、男の手からも遠のいた。彼女は男の心を疑つた。母に責られたと氣がついた。興奮して心は次第に荒んで來た。酒も飲んだ。いろ〳〵な男にも會つた。そのうちに、曾我の家

の五郎を客にしたといふので、其時分旅に出て居た男の許から、絶交を宣告された。こゝに頼みの綱は切れて、取縋みちは失はれた。

程なく彼女は病ひを得て、清水邊へ出養生をする身となつた。彼女は如何なる手段をとつても、男にちかづいて情の復活を求めやうと急つた。男に會ひたい一心から、怪しい新禱者に誘惑されて可憐にも、悪棘な色魔のために汚されもした。しかしうるさい世間の口といふものには一點の同情もなかつた。寧ろ面白い事としてこのことに尾鰭をつけて甲より乙に傳へた、彼女の天地は狹められた。

未だ未練の焔が消えなかつた男も、こゝに於て全然冷めたい灰となつて了つた。彼女は失望の奈落に陷つた。

祇園を去つて大阪の島の内から出たのも、其大阪から姿を匿して、大津の女髪結の梳手となつて居たのも、母親が娼妓に賣ると騒いだのも一先無事にすんで、結局神戸へ住み換へと極まつたのは、大分後の事であつた。

情に熱して居た血が冷めたくなるに從つて、心に淋しみが湧いて來た。けれども慾の請求は血の冷めたくなるのを宥さなかつた。

此場合唯一の同情者として田中といふ客があつた。彼女は其客より得た肉の慰めに滿足して、潔よく死の途についた。

自分は永く京、大阪に暮したが、不思議にもマル子といふ名は記憶になかつた。のちに彼女の身の上を委しく聞いて、何となく懐かしい感じがして、會たくつて堪らなかつた。今更一度でも會つて置かなかつたのが、殘り惜しい氣がしてならない。

露光量違いの為重複撮影

噫、彼も「淪落の女」であつた。

捨ばちのお時

露光量違いの為重複撮影

噫、彼も「淪落の女」であつた。

捨ばちのお時

二、捨ばちのお時

一、プランタンの一夜

正宗白鳥君　足下。

先夜は、カフエー、プランタンで、大に失敬しました。酒を勸める事の上手な横山辯護士や、眉を八の字に寄せて居る松永ニコ〳〵君や、横山君の友人だと云ふ品川君などが居たので、ツイ調子に浮かされて浪花節まで唸つて了つた。氣持好く醉つて、彼れから電車で、青山の宅に歸るまで、私は近頃に無く愉快を覺えた。あゝした歡樂の夜が、また有れば好いがと思つて居ます。

カフエー、プランタンは、主人の松山省三君が、洋畫家である緣故も有るでせうが、こゝに集る人々は、若い文學者や若い畫家、若い歌人、若い俳優、若い新聞記者などが多い。唯、プランタン其のものゝ空氣が、何となく華麗で無いために、近頃は「趣味の人々」も、自然と疎遠になつて居る樣ですが、夫しでも時々、彼所で足下に逢つたり、吉井勇君や生田葵山君の顏を見たり、知合の新聞記者と會見する事を、私は快樂の一つにして居る。君が小田原に旅行したとの「文藝だより」を見て居たゞけに、彼所で君に逢つた時には、何となく意外にも思つたし、また嬉しくも思つた。

顏にほくろの有るお柳と云ふ女、愛國婦人會員然たるお梅と云ふ女、二人とも男を引付ける愛嬌は無い。無口で、無愛相で、言ひ付けられ

た用事しか仕ない所が、反つて面白いでは有りませんか。若い色氣のある女は、カフエー、ライオンにも居る、ウーロン、チーにも居る、淺草のよか樓にも居る。種々の料理店が、料理以外に、別に、若い美しい女を看板にして、客を引かうとして居る中に、單りカフエー、プランタンが、各階級のメンバーと、飲食を主とする人々にのみ依つて、激しい生存競爭の中に立つて行かうとして居るのを、私は風變りで宜いと思つて居る。是非の評判は種々有る樣だけれど、仕事に疲れた夜、脂肪濃い物が食ひたい夕など、私は相變らずプランタンの扉を開けて居る。お柳さんのほくろなんかは、頭から問題になりません。

彼の夜、私が「南部坂雪の別れ」の一節を、雲入道張に唸つて居た時、ドヤドヤと入つて來た一群の男女があつたでせう。コーヒーと甘い酒

を注文して、面白氣に調子高に話し合つて居た一群、彼の中に藝妓風した一人の女が居たのを、君は確に見たであらうと思ふ。黒縮緬の羽織を着て、左の中指に金剛石の指環を光らせ、大きな廂髪の鬢のほつれた横顔を、君は何と讀みましたか。下谷か、葭町邊の藝妓に違ひ無いと、私は直ぐ直覺したが、東京の藝妓にしては餘に色が褪めかけて居る。寧ろ宇都宮か、日光か、水戸邊で見るべき中年増の藝妓で、話の中に、屹度、「妾、東京に居た時はねえ」を躁返す類の女に相應しいと見た。其の女は、私の浪花節を唸つて居る汗ばんだ横顔を、チヨイ〳〵窺く樣に見て居たが、やがて連の男達を急き立て歸つた。後には横山辯護士と松永ニコ〳〵雜誌とが、ニコ〳〵の定義が何うの、ニコ〳〵は現代的で無いのと論じて居たが、果は飲め飲まぬと云ふ爭論に

なつた。君がインバネスと鳥打帽で立去り、私が外套の襟を立て出たのは、それから小半時も經つてからである。

日本酒とビールと、ドムとウヰスキーと三鞭酒と、これだけ飲めば大抵の者は醉ふ。私も彼の晩は、何時になく醉つたと見え、宅に歸つてからも、大きな聲で詩を吟じたと云つて、翌朝、細君から散々小言を食つた。女房や子供があるのに、燈火の巷に歡樂を貪ることは、舊い道德の前に、赦され難い罪惡の樣にも思ふが、然し、美味い酒は何時飲でも美味く、若い女の顏は何時見ても美しい。時あつては、妻あり子あるを忘るゝの若やかさに復つて、甘き酒の滴りに醉ひ、美しき戀の泉を掬ぶのも、私等の「生」だと思つて居る。そこに、謂ふ所の中年の悲哀があり、そこに謂ふ所の三十五歳の煩悶がある事を、君だけ

は、同感を有つて見て呉れるだらうと思ふ。

同じ岡山縣の出身であると云ふ因縁は、此の手紙を君に宛て送る重な要素になつて居るが、プランタンの彼の夜に見た藝妓の横顔も、此の通信を君に送るべき重大な因縁となりました。こんな手紙を送るのは、日本有數の小説家たる君の尊嚴を犯すこと多大であるが仕方がない、見込まれたと思つて、斷念めて貰ひませう。（汽車中にて）

二、廂髪に結た中年増

彼の翌朝、十一時頃新聞社へ出ると、私は或る秘密事件の特別探訪を命ぜられて、横濱から、鎌倉、藤澤、國府津の方面を歩き廻つた。段々事件の端緒を得るに從つて、私の身體は一地方に滯在するを許さ

れず、それから東京を素通りして、兩國驛から成田行の二等車に乘つた。第一回の通信は、其の夜更けて、成田へ着くまでの汽車中で、走り書きしたものです。最う讀んで呉れたこと丶思つて居る。

成田へ行つても不動様には參詣せず、翌日の正午頃、私はまた汽車中の人となつた。成田から千葉、我孫子を經て、漸と此の△△町に着いたのは、雨催いの風寒く車窓に吹く夕暮であつた。——この町の名を明ら様に云ふのは、何でも無い事ですけれど、新聞社の命令で探訪して居る事件に、重大な關係を持つて居る土地だから、暫く△△町として置く——。曾て一度、悲慘なる母子の自殺事件を探索するため、出張して來た土地ではあるけれど、心忙しい黄昏に見る町の姿は、宛然初見參の土地に來た様で、此の宿屋の二階に落着くまでには、尠ら

ず車夫公を煩した。私は今、△△町第一と云ふ旅館の二階の一室で、東京に居る君に宛て、この手紙を書かうとして居るのである。

車夫の紹介が好かつたと見えて、通された二階の一室は、兎に角この家の第一號室である。南が硝子障子で西が高い半窓、十疊の中央に置かれた洋燈も、東京では近頃見られない總ニッケルである。床の山水畫には直彦の落欵があるし、額の「半醒半醉是仙境」には、「博文」の二字が殊に目立つ。猫柳か何かを投げさしにしてある花瓶は、恐しく時代の付いた青銅で、床柱もピカ〳〵と異樣に光つて居る。縣の土木吏か、郡長樣か、警察署長閣下でないと、滅多に通さぬお座敷らしく見えて、何となく可笑しくなつた。私は此の部屋で外套を脱ぎ、宿の褞衣に着換へるや否、暗い浴場で据風呂を浴び、汽車で疲れた身體に

先づ一杯の酒を呼んだ。番頭か下男か判らない樣な風體の男が、恐る〳〵宿帳を持つて來たから、一人一欄の所に大きく、「東京朝日新聞記者松崎市郎、三十五歳」と書いて遺つた。すると番頭奴、私の顏と宿帳を七分三分に見て、「へ、へ、へ、へ」とお辭儀をしたかと思ふと、スーと部屋の外へ姿を消した。

丸い手に戸を切らした十五六の小娘が、世馴れぬ樣子で酌して居たが、番頭の「へ、へ、へ」が消えてから、もの〻三十分も經つたかと思ふ頃、

「東京の方と聞いては、懷しいわねえ」

と云ひながら、一人の女が入つて來た。大ハイカラに結つた二十七八で、米琉擬いの絣の羽織に、縞物の前垂をして、袖口から赤い襦袢

を出して居る樣子は、女將か、非ず、女中か、非ず。藝妓か、非ず、たゞ者で無い。默つて、部屋に入るや否、女は、

「入つしやいまし、寒いぢや有りませんか」

と云つて、私の傍の四角な火鉢に寄り添つた。

「お酌、さして頂いても宜いでせう」

蓮葉な手つきをして、膳の前にある銚子を取上げて、心持品をつくつて見せる。人を人とも思はず、大臣にも、博士にも、巡査にも、職工にも、常に同じ態度で接して居る私も、此の女の男を男と思はぬ氣の樣子には、尠らず面食つた。默つて一杯受けて置いて、

「エラい人が飛込んだねゝ。君が何かい、僕のお酌をして呉れるのかね。え、姓名の未だ分らぬ人！」

と云ふと、女は眼を大きくして笑ひながら、

「妾、賴まれて來たの。東京のお客樣と云ふんでせう、何となく懷しくつてね。氣もそゞろに上つた譯ぢや有りませんか」

と、至極く物馴れた態度である。

白烏君足下、彼の晩、プランタンで、橫顏を見た藝妓が、此の女にそつくりなんです。鬢のほつれた工合から、頰のこけて居る鹽梅、眼が大きくて鼻が隆く、口許に利かぬ氣が見ゐる樣子など、實に彼の黑縮緬の藝妓にそつくりである。

「君は、東京に居た事があるだらう。妹が藝妓をしては居ないかい、下谷か、よし町で」

「東京、居た事がありますとも、東京には大變な思ひ出があるのです

よ。親も無し、兄も無し、妹なんか有りませんけれども」

酌すれば、女は幾らでも飲む。飲むことに於て、既に此の女は、私の大敵である。（△△町にて）

三、酒に語る過去現在

△△町の宿屋を出て、其の日は終日人力車に搖られた、事件の探訪も八分通りは要領を得たので、大分重荷を下した樣な氣持になつたが、未だ東京へは歸られない。今夜は前橋市の一旅宿で、久し振に美味い酒を飲んで、氣も心も輕く、好い氣持になつた。即ち彼れから後の通信を續ける。

彼の宿屋に來た廂髪の中年增は、近頃私が逢つた女の中で、最も誂

へ向の小説的に出來て居る一人であつた。二人で二合入のお銚子を十三本空けても、女は顏を紅くした限りで、別に取亂した風もなく、自分の過ぎ來し方を語り初めた。斯うした類の女が、身の上話をする場合には、殆ど判で押した樣に、說明と批評を加へるものであるが、彼の女は繪卷物でも展開げる樣に、平面描寫的に自分の經歷を語つた。

「貴郎、東京て所は、恐しい都會ねね」

を、其の話の最初の言葉として、

「こんな女が、世の中にあるでせうか」

を、其の話の最後の一語とするまで、女は約三十分間、順序宜く身の上話をした。

手帳にも書いて居ないし、細かい事は大半忘れて了つたが、大略だ

けは未だ覺ねて居る。女は名をお時と云つて、靜岡縣藤枝町の生れであつたが、幼少の頃兩親に連れられて、靜岡の繁華な町に出た。小學校を卒業すると直ぐ、朝風にリボンを飜へして、女學校の門を出入する鍛茶式部となり、十八の秋までは、世の鹽も知らず娘に爲つた。戀風身に泌む妙齡ではあるけれど、家庭が段々不如意となつて、雇人は解雇する、店は閉める。果は夜逃げ同樣の憂き目を見ながら、兩親に連れられて、東京の冬に泣く境涯に陷つた。女子大學が創立されてより、恰度二三年目の事ではあり、學問に對する熱い憧憬もあつたので、お時は「東京」と云ふ名を聞くと等しく、何も彼も忘れて喜んだ。あゝ東京、東京、女學生の澤山居る東京、女でも學問の出來る東京、二重橋の在る東京、國會の開ける東京、大きな呉服屋の在る東京と、お時

は飛び立つ思をして、長い間夢にのみ見て居た東京の土を踏んだ。うき世の戰ひに破れ傷いた兩親は、お時の悦ぶ顏を見て、人知れぬ涙に暮れたさうであるが、「東京病」に罹つて居たお時は、何事も知らなんだ。何事も知らずに、夢現の日夜を送つた。

東京へ出てからの生活は、夫れは實に悲慘なものであつた。父は傳を求めて司法省の使丁となり、母は裁縫の賃仕事して、淺草三筋町の露次内に、細い煙を立て居たが、親子三人麥飯を食ふにも、足らぬ勝の日が多かつた。國を出る時持つて來た僅少の金も、父が晩酌の醉、未だ十二分ならぬ間に、五圓紙幣一枚を餘すのみとなつた。東京の「空氣」に憧憬れ、東京の「色彩」を夢想し、東京の「響」に戀して居たお時は、此の時、初めて貧乏の味を知つた。「空想の東京」から、「現實の東

京」に觸れた刹那の驚嘆は、俄にお時の心を三四年老ひさせた。「斯うしては居られない、何か仕やう、親の爲には身を賣る女もあると聞く、妾の花は最う散つた、妾の娘時代はこれ限り」と、お時は娘心にも覺悟を極めた。慾じ文字を知り初めて居ただけに、慾じ舊道德の感化を受けて居ただけに、お時は烈婦傳や節婦傳の女を空想して、墮落の初一歩に踏込んだ。

れ時は麹町の××男爵家に、小間使として上つた。男に對する思慮も、大分成熟して居た妙齡とて、何時しか玄關番の法學生と戀に落ちた。夫れからは最う男を男と思はぬ樣になり、轉々して料理屋の女中にもなつた、待合の女中にもなつた。果は口入屋へ出入のお妾ともなり、三四人の旦那取りともなり、濱町の暗路に警察の眼を忍ぶ黑縮緬

の群にも入つた。今では斯うして、△△町に「酒飲みのれ時」と謳はれて、宿屋の手傳もすれば、料理屋の女中代りもする。好いたらしい方と見た時は、自分からしなだれかゝる夜半もあると、お時は笑ひながら語り終つた。そして、

「貴郎、れ酌をして頂戴な」

と、此の時、初めて膝をくづした。

白烏君足下、斯うした類の女の身の上話としては、別に奇異な事實も無いけれど、私はれ時が身の上話をする其の態度が氣に入りました。憂き悲しきを哀れとせず、酒に沒して他を思はず、身を捨てばちの其の態が、如何にも氣持よく痛快である。（前橋市にて）

四、自暴自棄の表と裏

その翌朝、前橋を出發して、谷中村事件でに馴染の古河町に來た。今や破壞され樣とする村の農家で、田中正造翁が血涙をふるつて怒號したのも、最う五年の昔である。古河町は何かに付けて、思ひ出の多い土地である。停車場も、宿屋も、郵便局も、警察署も。

馴染の宿屋で一風呂浴びて、馴染の老女將と昔話をしながら、酒を飲むのも面白い。秘密事件の特別探訪も、大に要領を得て了つたので、今夜は初めて「自分」が發輝される。宿の女將はホク〳〵して、彼の時居た若い藝妓は、役場の書記と馳落したとか、彼の女中は嫁に行つた、彼の女は情死したなどと、奇異の事實を報告して呉れる。僅五年の間

に、人の運命と云ふものは、斯うも變化するものかと、今更の樣に、人生流轉の激しさを感ずること深い。

白鳥君足下、酒を飲んで別れただけでは有るけれど、私は未だお時の事が忘れられない。彼した女は、行末何うなるのでせうか、人の妻となつて、平凡な家庭で死水を取られるのが落か。或は多々益々發展して、飲めるだけ飲み、食へるだけ食ひ、着られるだけ着て、欺されるだけ欺し、暴れるだけ暴れて、死ぬるのがどん底でせうか。彼の女の行末、彼した類の女の未來ほど、解き難い「謎」は無い。△△町の樣な、人にも金にも乏しい田舍に居て、昔の夢を繰返しながら、老行を知らぬ顏に暮して居る人ほど、世に悲慘なものは無い。男と云はず、女と云はず、自分の若く華麗なりし昔の思ひ出に笑みて、現在の苦痛

と未來の絶望とを忘れんとして居るのは、眞に痛ましく悲慘である。

た時の如きは、樂しかりし昔が有つたと云ふで無く、微笑むべき過ぎ來し方が有つたと云ふでも無いに、夫れでも現在に生きんとするよりは、過去に生きんとする努力の方が強い。酒に醉へば、直ぐ有りし昔の事どもが、走馬燈の樣に浮んで出て、初對面の旅客にまで、身の上話をさらけ出して了ふ所に、た時の「煩悶」と「涙」が有る樣に思ふ。

男を弄んだり、男に弄ばれたりする境涯にある女、殊に日蔭の花と咲く賣春婦の群には、その心持も十人十種の差別がある。十六七の齡若い女は、美しい衣服が着られて、若い男に接觸する機會が多いのを此の上無い快樂にして、自分の境遇の賤しくて果敢いことなどは、反省る暇も無く、其の日その日をはしやいで暮して居る樣に見ゐる。少

しく齡をとつて二十三四となり、濁り江の水の臭氣を自覺し初めた女になると、悔恨の情、煩悶の念も激しくなり、救の手を求めること熱心であるが、不幸にして助けられる女は稀で、多くは自暴自棄の淵に沈んで了う樣である。此の浮むか沈むかの岸邊に立つて、浮む者が十人有りとすれば、沈む者は九十人の多きを數へても間違は有るまい。唯、同じ自暴自棄の群にも、苦勞性とのん氣性とがあつて、苦勞性は常に自覺し反省して、淺間しい境涯を脱け樣と悶掻きながら、力が足らなかつたり、弱かつたりして、遂に身を捨ばちに持くづす。のん氣性に至つては、考へたつて駄目なこつた、何うせ傷の付いた身體だもの、斯うして一生を送る他は無い。男なんか口と涙とで、何うにでもなる代物だ、そんな代物を相手にして、一生を面白可笑しく送るのも

陽氣で賑かで宜い、などと云つて居る。然も、のん氣性ののん氣に見える皮一つを剝いで見ると、其所に無量の涙があり、其所に無限の悲痛があるかも知れない。

お時は、身を捨ばちに持崩した女の型として、滅多に得難い一人である。眞面目で居る時は、種々の事を考へて、思はず落涙することもあるけれど、そんな時には何よりも先づ酒を飲む。飲んで居さへすれば、醉つて居さへすれば、世の中が面白くて面白くて仕樣が無い、と云つた樣に覺ゑて居る。

「東京の方にお目にかゝると、ツイ愚痴が出ますけれど、町の人なんか相手になりませんからね。酒飲みのお時、お時で通して居るんですよ、ほんとに馬鹿な女でせう」

何も彼も知つて居ながら、自暴自棄の生活を實行し得る者は、今の世に於ける强者である。東京の風に吹かれて、弱者の群に落ちたお時が、△△町に流れて、强者の一人たることは、面白い現象でないか。

（古河町にて）

五、女から長文の手紙

正宗白鳥君足下、△△町は遂に△△町として置きませう。五日の旅を終へて、今夜東京に歸るや否、私は直ぐブランタンに來た。横顏の様に似て居る藝妓を見て、遙にお時のために、乾盃して遣る積でしたが、來たのは生田葵山君一人で、待設けた「横顏」は殘念ながら、遂に見ることが出來なかつた。

旅先から出した手紙は、皆讀んでくれた事と思つて居ます。詰らな

い女の事なんか書いて、私自身でも詰らないと思つて居るが、事實が下らないのだから、眞に以て致し方が有りません。今夜は久し振でほゝくろの有るお柳さんの顏も見たし、愛國婦人會員然たる、わ梅さんの姿も見て、如何にも東京に居る樣な氣持がした。東京に居ては左樣でもないが、旅から歸つて見ると、東京は明るくて華麗で、私等の生活には、眞に相應しい樣な氣持がする。「東京」の眞趣を味はんとするには、時折、旅行をするのが一番好い樣に思ふ。

わ時に就ては、最う何等報告すべき材料も無いが、唯一つ、彼の女から來た手紙をわ目に掛けませう。捨ばちの女でも、女は何所までも女だと見ゐて、彼の宿屋の二階で、私に話した事を、非常に氣にして居るから可笑しい。思ふに、新聞記者と云ふ事が判つて、新聞にでも

書かれはすまいか、との心配の有るらしい。その手紙は、卷紙に四尺もある長さで、惡い墨の濃かつたり薄かつたり、讀むのに大分骨が折れたが、然しなか〳〵の名文である。言文一致體と候體とが、混合して居るのも、わ時に於ける新しい試作の一つと見ゐて、讀で行く間にも、可笑しくなつて噴き出した。

妾はこんな字しか書けません

先日は眞にまことに、失禮いたし申候、わ酒を澤山いたゞいて、醉ばらつてしまつて、いろ〳〵の事を申し上げた樣ですが、あれは嘘が大分まじつて居ますから、その積でわ聞捨のほど願上候、妾もすゝめることは上手なつもりですが、貴君樣も女に酒を飲ませることは上手にて、ツイ〳〵つり込まれて、珍しく大へゞれけになりまし

た、酒のみのた時ごころか、あれでは猩々た時だと云つて、宿のはげ頭に笑はれたのが、口惜しくて〳〵堪りません、あんなに醉ふ筈ではなかつたに、妾どうしたんでせう、やつぱり貴君様が惡いのです、やつぱりあなた様が惡いのです

貴君様は新聞社の方にて候由、あとで宿から聞いて驚きました、新聞のたね取りさんなら、その考へでお相手いたせしものを、あの晩は何もかも大失敗でした、妾は醉ふと膝がくづれて、い〻年増だのに、赤いおこしを出すくせがあります、赤い長じばんだけは、婆になつても着るつもり、氣が若いと云つて町の者なんか笑ひますが、妾は赤い色が大すぎです、酒のみのお時なんか、實にいやしい女だと御さげすみなされ候や、そんな方ならば、身の上ばなしなんか嘘

ばかり云ふのでしたに、妾御酒をいたゞくと、ほんとに馬鹿になつて仕様がない、こんな馬鹿者でもこの町に居る間は、貴君様のことを忘れない、ほれて居るのではありません、あまり酒を飲まされたそれが口惜しい〳〵からです

私のはなしを新聞なんかに出すことだけは、何卒々々御ゆるし被下度候、朝日新聞にか〻れますと、すぐ町の問題になりますから、それだけは神かけて御願申上げます、尙々テンプラン何とか申すところにて、お逢ひなされし藝しやが、このた時に似て居るとのこと、どちらが美人ですか、それだけ御知らせ下されたく、妾の方が女ぶりがよかつたら、何でも貴君様のすきなものをたごります

左様なら、御きげん宜しく、これだけ書くのに、三時間か〻りまし

た、雪が降るかも知れません、御身御大せつに祈上候、かしこ

酒のみ女より

松ざき旦な様

此の手紙を讀で見ても、お時の自暴自棄、お時の捨ばちは、未だ自意識の境を脱して居ない事が判る。斯うした女は、救はうと思へば救へるものを、お釈迦様もエス様も、未だ朝寢の夢が覺めないで、居らせられ給ふと見える。

最う書く事が無くなつた。ドムでも飲んで宅へ歸り、久し振に可愛い妻子の顔を見ませう。

下らない事ばかり書いて、失敬。（ブランタンにて）

——四五、二、記——

新聞記者の見た

正宗白鳥

拜復

先日鹽原に遊び、君の宿られし楓川樓に泊り、それより、大洗へまゐり、磯節の安中に會ふと、同人がふと君の事を尋ね申候。君が何時かわざ〳〵この男を捜して、その喉を推賞されしとかにて、非常に喜び、よろしく傳へて呉れと申居候。

但し、小生は安中の聲にさ程感動いたず、君がその聲を日本一人の美音といはれしとか傳聞して、成ほど君は感じの強い人だと思ひ候。この事のみではなく、小生の接觸せし限りにては、君の言行は善惡美醜

露光量違いの為重複撮影

ともに平均した人間の言語行動などよりも、一際強く太きやう感ぜられ候。小生がプランタンにて會つた人々を思出して居ても、君は群集の中に太い線で描かれたやうに映じ候。この點から見ても君が新聞記者としてすぐれたる手腕を揮はるゝも無理ならぬ事と存じ候。

淪落の女は、こんな社會の内情に通ぜる君のことゝて、中々に穿つた所も多く候が、小生は女その物よりも、この作によりて、作者の生活、感情、神經の現れたる點に一層多くの興味を感じ候。新聞記者の見たる淪落の女と題すべきものと存じ候。小説家の見たる淪落の女、教育家の見たる淪落の女、警官の見たる淪落の女などゝは、また別樣の趣有之候。早々

十月四日

お小夜の行方

露光重違いの為重複撮影

さすがに平均した人間の言語行動などよりも、一際強く太きやう感ぜられ候。小生のプランタンにて會つた人々を思出して居ても、君は群集の中にあり線で描かれたやうに映じ候。この點から見ても君が新聞記者としてうまくはまれる手腕を揮はるゝも無理ならぬ事と存じ候。

淪落の女性、こんな社會の内情に通ぜる君のことゝて、中々に穿つた所も多くとか。小生は女その物よりも、この作によりて、作者の生活、感情、神經の現れたる點に一層多くの興味を感じ候。新聞記者の見たる淪落の女と題すべきものと存じ候。小説家の見たる淪落の女。教育家の見たる淪落の女。警官の見たる淪落の女などゝは、また別樣の趣有之候。早々

十月四日

お小夜の行方

三、お小夜の行方

一、何所へ行つたらう

お小夜は、何時の間にか、居なくなつてしまつた。何所へ行つたのであらう、何うしたのであらう。

「淪落の女」の第三篇として、成女學校長宮田脩君足下に宛て、「お小夜」を書く豫定であつたに、未だ書き得ない間に、お小夜の所在は判らなくなつて了つた。妾に爲つたのか、廢めたのか、死んだのか。それさへ今は、確と判らなく爲つてしまつた。

喜多村君に宛た「黒縮緬」、正宗君に宛た「捨ばち」と同じ調子で、型

の如く、先づ……

成女學校長宮田脩君　足下。

去年の春も未だ淺い三月下旬、東京朝日新聞に、「現代の女學生」を書き初めた頃一度と、神田一ッ橋の帝國敎育會内で、女子敎育家懇話會があつた折に一度と、貴君にお目にかゝつたのは、僅に此の二回に過ぎぬけれど、私は何だか貴君を忘れる事が出來ない。

私の樣な微々たる新聞記者に、記憶されて居やうが、忘れられて居やうが、敎育家たる貴君に、何等影響する處有りとも覺えぬが、然し私は貴君が好きである。當代の女子敎育家の中で、比較的舊い型に囚はれて居ない、何と無く奔放自由な調子の有る一人として、私は貴君が好きである。成女學校の經營者であり、學長でありながら、常に敎

育者の立脚地を離れて、今の敎育界を是非し批評し得る一人としても、私は貴君が好きである。好かれた貴君に、好いた私から此んなものを送るのも、何かの因緣と一笑して頂き度い。

實は此の一篇を何人に宛て送らうか、と私は種々考へた。女子敎育家の中で、一度なり二度なりお目にかゝつた方は、成瀨仁藏、三輪田元道、山脇房子、嘉悅孝子、下田歌子等の諸家の他に、五指に餘る位は有る。然し「成瀨仁藏君足下」とか、「山脇房子女史足下」とか書き出すと、派手な事は派手であるが、何だか斯う反響が無い樣な氣持がするので、私は思ひ切つて貴君に宛て送る事にした。新俳優や小說家などゝ違ひ、世間から眞面目な地位の人と目されて居る敎育家の群へ、「淪落の女」みたいな題材を提げて、臆面も無く見參すると云ふ事は、

私に於てこそ多少の意義ある仕事なれ、送られた御當人に取つては、多大の迷惑であるに相違ない。其の御迷惑も或る程度までは察して居ながら、私は思ひ切つて此れを貴君に宛て送る事にした。江湖に落魄して、私娼の群に泣いて居る女と、賢妻たれ良母たれと敎えて居る女子敎育家との間に、何の交渉する所があらう、など丶云ふ可からず。女子敎育家も、斯う云ふ問題に就て、何時までも素知らぬ顏の門外漢で、過ごしては居られまいと思ふ。

宮田君足下、常に社會の各方面に接觸して、明るきよりも暗きを見る事の多い私等は、「淪落の女」が、單り私一人の空想の所產でなくて、世間の到る所に實在して居る眞實の前に、且つ悲しみ且つ痛み、且つ戰慄せざるを得ないのに驚く。宗敎も、道德も、敎育も、法律も、藝

術も、新聞紙も、凡てのもの皆權威を失つて居る世の中に……。

と、こゝまで書きかけて居た三月十五日、突然、社命を受けて、甲州へ出張する事になり、滯留二十日間。皇太子殿下の行啓やら、山梨縣の視察やらで、方々を飛び歩いて居る間に、お小夜は何所へ行つたのか、其の姿を隱して了つた。

「現在」のお小夜を捉へて、大に寫しもしやう、大に論じもしやうと思つて居たに、今は最う「過去」のお小夜に爲つて、飛々の日記のページに、僅に其の面影を尋ね得るに過ぎない。それにしても、お小夜は何うしたらう、何所へ行つたのであらう。

仕樣が無い、過ぎ去つた日記の所々を拾はう。

二、不得要領の日なり

……月……日、曇、風少しく吹く。

探訪にも出ず、雜報も書かず、編輯もせず。終日「敷島」を吹かして過す、無爲、眞に無爲の日なり。

「平家物語」を讀でみたいと思ひ、「獨歩全集」を見たいと思ひ、强烈な洋酒を飲みたいと思ひ、表情の强い女と話したいと思ふ。何か斯う世間をアッと云はせる樣なものを書いて、知らぬ女からでも、手紙を貰ひたい樣な氣持がして堪らず。玉突三ゲーム、悉く〳〵敗。

夕暮、銀座通りを歩く。男の顔、一人として疲れざるはなく、女の髮、一人として亂れざるは無し。金の千圓も懷中にして、欲しい物を

買ひ、飲みたいものを飲み、食ひたい物を食つて、自働車に乘つて、東京市中を飛び廻つたならば、少しは面白からうと思ふ。何うしても電車に乘る氣がせず、八拾錢と云ふところを六拾錢に値切つて、雷門まで人力車を走らす。

駒形邊で日暮れたり。電燈と瓦斯の光、電車の響、いよ〳〵「我が世」が來た樣な心地す。よか樓に入つて、パン、スープ、ビフテキを食ふ、皆、申し合せた樣に美味からず。小山内薰さんを知り、生田葵山さんを知り、永井荷風さんを知り、吉井勇さんを知り、市川猿之助さんを知り、兒玉花外さんを知り、大學の御連中さんを知ると云ふ女あり。高島の娘々して、薄化粧に赤い帶、美貌を誇り顏の態度可愛からず。八拾五錢の御會計に、拾五錢の剩錢受けて、更に壹圓紙幣一枚

を恵み遣り、「に前はエラいよ、文士の名を知つてるから」と、嘲り去る。女は眼を丸くして、「貴君、酔つたわね」と笑へり。

人に餘計な金を遣るは、好い氣持なり、惡い氣持のせぬものなり。然し、よか樓の女中に壹圓、何のために遣つたか、考へて見れば馬鹿々々し、損な事なり。あれだけ有れば、おでんが五度位は食へたものを、何のためにあんな眞似をしたか、淺間しとも淺間し。一代の運命を占ふにも、拾錢の代價にて足れるものを、西洋料理の女に壹圓は、過ぎたり、大に過ぎたり。

中店より觀音堂、活動寫眞の方へ出て、更に其の裏通りに出づ。おでん屋、いり豆屋の匂ひ鼻を衝く。所謂銘酒屋の所在地、「梅ぞの」「吉の井」などの軒燈も、大方は電氣なり。

「金縁眼鏡の先生、に寄りなさいましな」

「外套の先生、一寸、外套の……先生てばよウ。親方さん、一寸、親方さん、入つしやいましよウ」

「あら、杉山さんぢやなくて、杉山さん。杉山さんに似た何所かの人ちよいと、色男……」

「一寸、一寸、お君さんの方、に信さんの方、寄らないと言附けますよ。中折に、鳥打帽、ねえ。一寸、に上んなさいよウ」

雜司ケ谷の鬼子母神にて、恰も雀の囀るを聞く樣なり。學生風した勞働者、勤人風した中學生、印絆纏、インバネス、脊廣服、羽織などぞめきつゝ行く。藝妓は座敷で客をあやなせど、こゝの女は軒端で男を招く。商賣に變りなけれど、境遇に相違あり。格子先に立止まつて

チヤホヤ言はれて居る男の顏は、判で押した樣に皆間抜面なり。淺間しとか何とか云ふは力弱し。こんな所は、大阪にも京都にも稀なり、有つても斯う猛烈でなく、露骨で無し。歩いて居ても、殖民地的の不安な氣分がして、撲られ相なり、蹴られ相なり、踏まれ相なり。

何しに此所へ來たか、わ小夜に逢ふため、わ小夜の變り果た姿を見たい爲めなり。諸所を尋ねても判らず、「居ない女なんか探さなくても、女の多い國ですよ」と、一軒では散々に毒口吐かれたり。天下の新聞記者、人生問題に就て、特種の感興を有つて居る男も、二束三文の價値しか無い人間の如くに配はる。

赤電車で歸宅、不得要領の日なり。

三、お小夜であれかし

……月……日、好い天氣の午後三時頃、お小夜を使つて居た××家から、松崎さんに電話とあり。書きかけた情死の雜報を半にして、受話器を耳にすれば、先は女の聲なり。

「お小夜の居所が判りました。淺草……の何でも御堂の裏の方で、白首になつて居るのですつて。何うしたのでせうねえ、何うしたと云ふのでせうねえ。全く墮落だわ、貴君、大變な墮落よ、何う思つて、何とも思はないんですか、貴君は。白首、淫賣……」

お小夜を女中に使つて居た、牛込の××會社員夫人某からの電話と判る。「はア」と「へえ」と「驚きましたねえ」と、「何うしたと云ふんで

せうぬえ」とを繰返して、電話を切つて了つたが。續きの情死記事を書かうとしても、筆が鈍つて少しも進まず、一段半を書いて了ふのに、一時間と二十分を費したり。愚、愚。

夜、大阪の齋藤弔花より電話、「二三日前上京す、久しく君に逢はず、痛飲淋漓を欲す。宿は日本橋本石町、代議士某々等あり、久し振に浪花節を聽かしてんか」と。弔花にも逢いたく、お小夜の居所も突き止めたし。弔花は感興の人なり、お小夜に逢はんとする男も亦、感興の人たるを失はじ。先づ弔花を訪ふ。

「淪落の女」に、何等、藝術的の色彩あることなし。事實か、事實に非ず、創作か、創作に非ず。然も小説に飽き、事實譚に倦みたる讀書界は、一種特別の興味を以て、君の「淪落の女」を見るべし。書くべ

し、大に書くべし、と弔花、口を極めて煽動す、一度はくすぐつたい樣な氣持がしたれど、考へて見れば或は左樣かも知れずと、少々自惚れざるに非ず。

今の世の文人に、藝妓を崇拜し、藝妓を謳歌し、藝妓に同情するもの四人あり。その一を青柳有美となし、その二を泉鏡花となし、その三を田村西男となし、その四を杉村楚人冠となす。何れも實在の藝妓を捉へ來りて、自家空想の所産となし、盛に其の意氣を上げ、その情操を説き、その眞面目を論ず。唯一人の「松崎天民」なるものあり、藝妓を見ずして私娼を説き、賣笑婦を論じ、そこに人生の深底を探らんとす。大に住し、折角奮ふべしと、弔花、醉に乘じて益々煽動す。辭去して後、好い氣持になつて、淺草行の電車に乘る。宛然、大家にで

もなつた樣な氣持なり。

觀音堂の裏手を徘徊す。鼠鳴きの聲頻りに聞え、「一寸、一寸」と小聲で呼ぶ聲も盛に聞ゆ。我が尋ぬる「お小夜」は、此の夜何所の奥座敷で、男と對座せるにや。巡査に尋ぬべき事ならず、辻待の車夫に問ふべき事ならず。探訪術に掛けては、神出鬼沒とまで行かずとも、大概の人にはひけをとらぬ男も、お小夜の所在を尋ねるには、實際閉口頓首の他なし。十一時、失望して歸らんとし、料亭一直の近所を公園に出んとする曲り角に出づ。

「ちよいと、お入んなさいよ」

呼込まれたるを幸ひに、曲り角より×軒目の銘酒屋に入る。フロックコートに山高帽、金緣眼鏡に細卷の洋傘、踵に護謨の附いた靴と云

ふ扮裝。この邊の女の眼には、新聞記者とは見えず、醫學士位の相場ならん。萬事鷹揚に「ビールでも飲まう」と口を切る。

チャプ臺の上に、エビスの大が二本、白い豆、海苔など出で、女二人、頻にチヤホヤ云ふ。

「お前の所にお小夜と云ふ女、居ないかい」

試みに問うて見る。女は變な樣子をして、

「お小夜？　居ません、ねえお芳さん。お小夜さんなんて、居ないわねえ、そんな人？」

「えゝ、あのお艶さんが、お小夜と本名、云ひはしないか知らん。聞いて御覽、お信さん」

二人は心當りでも有る樣に、神妙らしく云ふ。

あゝ天の引き合せか、お小夜であれかし。

四、唯一の道は何ぞや

お艶が、其の尋ねるお小夜であつた。

牛込の××君の許で、女中奉公して居た頃は、未だ處女の色艶があつた。何を言つても直ぐ顔を紅くして、オド〳〵したのが可愛かつた。十六から十八になるまで、歳月にしては短い三年の間に、若い女は斯うも變るものか。お小夜は最う處女では無かつた。

昨夜、お小夜に會つて歸ると直ぐ、牛込に宛て長い手紙を書いた。後日の思ひ出にもと、こゝへ書き止めて置く。

拜啓、今夜淺草觀音堂の裏手、××家と云ふ銘酒屋にて、漸くお小

夜に逢ひ申候。

仰せの如く、白首の群に墮ちて、晨に南の客を送り、夕に北の人を迎へる境涯。荒い鼠縞の新お召に、茶色がゝつた大きな模樣の帶、濃藍色の半襟に、赤い帶揚の映り好き。長襦袢が縮緬に化るの日は未だ遠かるべき樣子なれど、此の節はメリンスでも事足る枘合の美しさ。××家でも客分たり、女王たるの格にて、他の女を尻目に見る樣、これがお小夜かと驚かれ申候。

（まア、松崎さん、妾が此家に居ること、何うして判つて。え、えゝ、最う妾、何うしやう……）

と、膝すり寄つた時、安香水の匂が致し申候。大きな廂髪の昔は夢と過ぎたり、根の低い銀杏返しに、兩鬢を深く取つて、耳を掩へる

様、場末の安藝妓そつくりの姿に候。

（驚いたらう、僕も驚いたよ）

と云つて遣ると、心持悄氣た様子になつて、

（牛込でも、知つていらして、妾がこゝに居ること。え、妾、最う何うしようか知ら……）

と、身を慄はせて落涙致し候。戸籍面は十八歳でも、ほんとは十九歳の皮膚の色艶、張り切つた筋肉に、未だ處女の匂が濃へど、其の眼は最う男を知り初めた女の瞬きに候。何うしてこんな所へ來たのかと云つても、お小夜はそれには答へず。

（男で、二つの名が有るのは、繪師や、小説家や、新聞記者や、役者でせう。女で二つの名が有るのは、藝妓、娼妓、賣春婦、ね。女は

割が悪いわ、お丶厭、厭）

とて、今は世を欺く假の名を、お艶と云つて居る由を、冷たく笑つて語り申候。

世間では斯うした女の現狀を見て、一も二も無く「白首」と輕蔑すれども、白首それ自身に云はすれば、少しも白首が悪いのでなく、皆男が悪いのに候、皆世間が悪いのに候。

（男つてもの、馬鹿ねえ、男つてもの、罪人ねえ、男つてもの、助平ねえ。妾最う覺悟してよ、世界の男を咀ひ殺す……）

傍に居た二人の女に妨げられて、眞面目な話も得せず、其の儘立歸り候。今の間なら海のものとも、山のものとも成り得べし。借金と申しても、五拾圓か六拾圓を越えざるべく、何とか仕てお遣りなさ

る御考へ無之や。取敢ず、右御報告のみ、匆々。

月　日　　松崎生

× × 兄

夜、土曜日の當直、淺草の警察で、私娼の大檢擧をなす由、通信社の電話があつた。百人の内、八十名は梅毒患者で、殘る二十名も壯健で無しと、曾て某署長の語つた事を思ひ起す。お小夜も彼な所で鼠鳴きをして居ると、何時かは拘留處分を受け、恐しい病毒を受けて、泣くに泣かれぬ身とならう。

彼等を救ふ唯一の道は何ぞ。信仰か、否、説教か、否、法律か、否、教育か、否。唯、男の同情のみ、唯、男の誠心のみ、唯、男の涙のみ。

その男は、何所に居る？

五、過去と現在と未來

……月……日、休、終日在宅。

大阪の客人と共に、一家擧つて三越見物、帝劇見物。雨催いの空陰氣にして、本を讀む氣もせず、手紙書く氣にもなれず。一人で茶を沸かし、一人で飯を食ひ、一人寢轉んで詩吟、薩摩琵琶、磯節、假聲、浪花節。これでも三人の子の父かと、自ら嘲り自ら笑ふ。

こんな日に誰か來れば宜いと思ふ。社の同僚を厭はず、同郷の友なら結構、女客なら大に妙なりなど、待つ心も無く待てど、誰も來らず。酒屋、薪屋、洗濯屋、郵便脚夫、近所の犬ジョン、瓦斯會社の男など出たり入つたりす。あゝ斯んな日に、お小夜でも遊びに來れば、たす

しを取寄せて、れ蕎麥を注文して、天麩羅を買つて、キリン位は飲ませて遣るべきものを。それ程の間柄でも無きに、此の二三日、れ小夜は我が考察力の全部を侵略して、晝寢の夢にまで鬢の香漂ふ。

れ小夜の過去、現在、未來を思ふ。

未來は何うなるか、運命の神樣ならでは、御承知の無い事なり。現在は何うか、白首なり、賣春婦なり、私娼なり、醜業婦なり。警察の嚴しい眼を忍んで、一圓乃至五圓の僅少な代價にて、肉體を賣つて居る女なり。泥水に沈むこと、僅に半歲ならずして、天下の男を呪ひ殺すと云ふ女なり。淺い反省と朧氣の覺醒はあれど、自分が惡くて墮落したとは思はず。何事も男のために斯うなつたと云ひ、男が惡いために、多くの女は此の樣な所に落ちる、と思つて居る樣子なり。謂はば

淪落の第一歩に入つた、娘々した白首の一人なり。

其の過去は何うか、神奈川縣の海邊に生れて、横濱の高等女學校に卒業間際まで學びたり。父あり、母あり、姉あり、弟あり、今日でも生活に困る樣な實家で無し。世上、多くの賣春婦は、墮落し行く原因と經路とを大抵同一にす。卽ち「境遇」の方では、

家庭の事情 ⎧ 實父の亂行、繼母の虐待、
　　⎩ 兄弟の不和、一家の貧苦、

家內の病苦、生活の窮迫、

などに原因して、これ等の不快や苦痛より脫離せんとして、知らず識らずの間に身を持崩す者あり。また一家の悲境を助けんが爲めに、女にして比較的收入の多き職業を求むる結果、事の善惡を識別する暇も

なく、一種の傳習的婦德觀に囚はれて、醜業婦の群に投ずる者あり。

お小夜には、こんな原因絶ゑて無し。

更に、これを「運命」の方から見れば、

一身の事情 { 性來の多淫、虛榮心の果、
男子の誘惑、自暴と自棄、
生學問の弊、男への反抗、

など樣々あり。お小夜は性來多情の女とも覺ゑざれど、相當の文字もあれば、女並の虛榮心もあり。何れかと云へば、墮落し易い性格を持つて居るに相違なかるべきも、白首にまで——極めて安價なる——墮落するとは、如何なる事情ありての事か、甚だ合點されず。

二十四五歲より三十五六までの女、小料理屋の酌婦、待合、宿屋の

女中、賣春婦の類は、能く口癖の樣に、「男には最う凝り〳〵した、世の中に男ほど薄情で、男ほど馬鹿な者は無し」と云ふ。これ女と云ふ一種の人間が、何も彼も男に信賴するが爲に生ずる所の結果にして、こんな事を云ふ女に限つて、實は男が居なくては、一日も活きる事が出來ぬなり。我が「お小夜」も、今日あるの責を、男になすり附けんとするに非ざるか、男こそ好い面の皮なれ。

薄暮、「二葉亭全集」を見る氣になり、二葉亭の傑出したる文人なりし事を思ふ。——

帝劇の連中、未だ歸らず。晩飯は一人で、鳥鍋。

六、痴ならずんば狂か

朝來、氣分勝れず、もの思ふ日なり。

妻が平生の苦勞を慰めて遣りたく、金あらばた召の袷衣造りて與へたく思ふ。三人の男子、何れも皆可愛し。養子にと望まるればとて、誰をか手放すを得べきぞ。長男に學校の帽子、二男に玩具の鐵砲、三男にゴム人形と靴を購ひ遣る。三圓足らずの金、飲めばとて、何程の醉をか買ひ得ん。三兒の嬉ぶ顏見て、心に耻づること多く、且つ深し。愚なる父かな。——

十一時出社、この日頃の怠慢、同僚に對して申譯無く思ふ。爲すべきこと、書くべきこと、一再ならざるべきに、何うしても仕事をする氣になれず。社に在るの間、妻を忘るゝ事あり、兒を忘るゝ事あり、家を忘るゝ事あり。心を白紙の如くにして、探訪に從事せんと欲し、

雜報を書かんと欲すれど、心身倦怠して、唯、事無きをのみ喜ぶ。斯る日ぞ、熱き湯に浴して、冷水を頭より浴び、强烈なるアブサンに醉ひて、淺草公園を徘徊するに宜からん。あゝ此の心、强き刺戟を求めて休まず、怒りたく、泣きたく、叫びたく、唄ひたし。

夜、カフエー、ライオンのバーにて、强くして甘き酒を飲む。夜の歡樂鄕は銀座なり、銀座の歡樂鄕はライオンなり。諸種の刺戟に生きんとする人々、來り群いて當代の風をなす。西洋人あり、代議士あり、式部官あり、伯爵あり、畫家あり、俳優あり、會社員あり、官吏あり、敎育者あり、番頭あり。强き酒と、人間の言語と、瓦斯の光と、電車の響と、相觸れ相接して、こゝに「夜の歡樂の都會」をなす。

銀座を歩きながら、別れたる「大阪の女」を思ひ起す。妻あり子ある

を忘れて、戀に狂ひたる當年の狂態を、懷しむの情に堪えず。妻は妻として相愛すべし、兒は兒として撫育すべし。然も此の「心の寂寥」を如何せん。新しき戀を戀する心、甘さ酒の醉より來る。途行く男の顏に、戀に餓えたる人の表情あるを見ずや。途行く女の顏に、戀を得んとする慾望あるを見ずや。何となく、俄に、お小夜に逢はん事を思ふ。

淺草行の電車に乘る。淺草橋にて、行くのが厭になりたれど、心を勵まして行く。銀座を歩いて居れば、何の遠慮も會釋も無けれど、中店より雷門界隈に入れば、何ものにか怯ぢ恐れるが如く、顏を見られる樣な心地す。銀座は燈火に燦けど、公園は淋しく暗し。

お小夜の家を訪ふ。「お小夜さんはねえ、昨夜からお客樣に連れられて、川向ふに行つてるのです」とて、他の女二三人、交る〴〵席に侍

して、頻りに遊興を勸む。

「貴郎が歸つたでせう、あれからお小夜さん、何だか變なことよ。松何やらさんには何だけれど、牛込に判れば何だとか云つて、それは〳〵悄氣て居てよ」

女等二人は、この刺戟を求むる男を、お小夜に戀する人と思へるにや、口を極めてお小夜の初心な事を語る。妾達、變な女の仲間でも、お小夜は學者なり、しつかり者なり、行末の事も考へて居れば、

「隨分、いろ〳〵と煩悶して居てよ。妾達の樣になつてはねゑ、最う六百六號なんですけれど、お小夜さんは、ほんとに可愛相ね。貴郎何とか仕て上げては不可ないの？」

など云ふ。お小夜不在、面白からず、樂しからず。

「酔ざめ」を乗せたる青電車にて歸宅す。

妻の寢亂れ髪、子供の不様なる寢姿を、五燭光の下に見る。戀も、酒も、歡樂も、刺戟も、何も彼も有つた譯のもので無し。「家庭」と云ふ重荷を負つて、戀の重荷を負はんとするは、痴ならずんば、卽ち狂か。あゝ、痴ならんずば、卽ち狂か。——

七、其の烏啼の夕暮に

た小夜の事が、日記に記入してあるは、以上の五日だけである。其の後一度、甲州へ出張する前に、わざ〳〵尋ねて行つて、少し許りの借金ならば、牛込の方で何とかすると云つて居るが、眞面目に復活しては何うかと、種々説いて見たけれど、

「御深切は難有う御座いますが、最う二三ヶ月辛抱して、自分で何とかして切り拔けますから、何うか構はずに置いて下さい」

と、笑つたり、泣いたりして答へた。

甲州の旅は長かつた。櫻開かぬ雨の朝に立つて、櫻咲いた雨の夜に歸るまで、三週間を峽山峽水に送つて、た小夜の事は、忘れるともなく忘れて居た。猿橋の茶店や、大月の宿屋や、鰍澤の小料理屋などで、我が「淪落の女」を見た度毎に、た小夜の行末も斯うかと、涙催さぬでも無かつたが、新聞通信の任務が忙しいので、「た小夜」のために、考へる暇とても無く、打過ごして居た。

東京に歸つてからも、「甲州見聞記」の愚文に惱んだり、「春を追ひつゝ」馳せ歩いたりして、た小夜を訪れる時間がなく、櫻の花の散つて

了う頃まで、××家の座敷に通らずして過した。二三ヶ月は辛抱して自分で何すると云つて居たものを、俄に居なくなつて了はうとは、實際、夢にも思はずして日を送つた。

四月……日の午後、水戸の東京朝日新聞通信員、東白蘋君が突然遣つて來て、未だ帝國劇場を見ないから案内しろとの事で、二人連で帝劇を見物した夜。佐藤紅綠君作の悲劇「母」に出る一女性。宇治龍子の扮した流れ渡りの賣笑婦を見て、俄にお小夜の事が氣になり出した。

宇治龍子の怪し氣な女は、

（妾は斯うして、世間を流れ渡つて、一生を送らねばならぬのか。顏には段々皺が寄る、髪の毛は次第に拔けて來る、末は野末でのたれ死をする運命か）

と、悲しい述懷をして、妾になつて居る家を出て了つたが……。お小夜も今の所に愚圖愚圖して居れば、皺が寄る、毛が拔ける、病氣になる。暗い觀音堂の裏から、明るい銀座へ連れ出すのは、浴衣の頃を待つて居られないと。其の夜、白蘋君を上野驛へ送つた序に、××家を訪ねて見ると、あゝ最うお小夜は居なかつた。

家の女達の話に據ると、「借金四十圓の代償として、冬の衣類十餘點を置きます」との置手紙して、御堂の屋根に烏啼きの胸騷ぎする夕暮に、默つて出て行つて了つたとか。これぞと云ふ情夫も無かつたが、隨分勝氣のテキハキした氣性だから、居所が判つたのを迷惑がつて、一時、姿を隱したのではあるまいか。と、家の者等は、猫の子一匹の行方を失つたよりも、大問題にして居ぬ樣子である。

た小夜には、未だ二三度逢ひたかつた。「淪落の女」の一人として、より強い印象、より深い感銘を、現實のた小夜によつて受け、これを成女學校長宮田脩君足下に送る筈であつたに。胸中の未定稿に着手しない以前、女主人公の所在を失して、生くべき筈の「た小夜」が、影の人「お小夜」に過ぎなく爲つたのは、何よりも口惜しく思ふ。

あゝ、た小夜は、何時の間にか、居なくなつてしまつた。其の所在を晦ましてしまつた。妾になつたのか、廢めたのか、死んだのか。それさへ今は、判らなく爲つてしまつた。

世の光の蔭に咲く、「白粉の花」達が、其の姿を隱すのも、さうした烏啼の夕暮か。——

——四五、五、記——

一種の女性問題

厨知　宮田脩

大正三年十一月十七日

松崎君が『淪落の女』を書かれたのは、如何なる動機に因いたものか、夫は僕の知るところでもなく、また知るを要する事でもない。たゞ僕があれを讀むで得た感想はと云へば、近頃面白い文學であつたと云ふより、少くとも僕にとつては、有益な科學であつたと云ひたい。勿論有益と云ふ點から云へば、終篇の「十二階下」を書かれた調子で、全體をもう少し學究的に精細に記載して欲しかつた。然し夫は餘りに研究的態度を以て見て居た僕の勝手な要求で、感興と云ふ事をも考へなければならぬ松崎君に對しては、聊か迷惑な註文かも知れない。と

にかく『淪落の女』は從來此方面の事に暗かつた我々に對して、極めて淺からぬ興味を與へられた事も鮮くなく、また我々のなすべき仕事であつて、而もトント閑却して居た方面をチクリと刺されたやうな心持のした文字であつた。

由來女子教育の問題が、現今の社會問題中に割合重要の位置を占めて居る事は、何人も首肯するところである。だから新聞にも雜誌にもはた著述にも、あらゆる方面の人が何等かの議論を發表するのが流行ものの一つになつて居る。然し其多くは大概一種の政策論で、女子教育の本領は單に良妻賢母を作るに在るとか、女子に職業を與へるのは弊害の大なるものだとか、貞操が女子の唯一の道德であるとか、其深い理由は敢て究めることもなく、事もなげに容易く斷じ去つて居る。

而して世間の多くも之を聽いて濫に雷同して居る。でなければ突飛な說を立てて全然反對な意見を述べる人もある。何れにしても根本の理由を沒却しての政策論では、よし其說に一時的の權威は有るとしても、系統的知識を重ずる現代人を承知させる事は出來ない。女子教育の目的が今なほ決つたやうで決らずに居るのも、畢竟此理由に因くものと思ふ。夫はともかくとして、女子教育の問題を解決する前には、先づ其對象たる女性問題から片附けなければならない。勿論從來とても女性とは何ぞやと云ふ問題に對する答解がないではなかつた。けれども其多くは社會生活の便宜を標準とした、コンベンショナルな議論であつて、何ものかに囚はれた皮相の見解に過ぎなかつた。だから此に新しい確固たる女子教育の方針を定める立脚地として求めらるゝ女性問

題は、少くとも人類學的に、心理學的に、生理學的に、社會學的に、犯罪學的に、病理學的に、乃至倫理學的に廣汎な科學的知識の諸方面から女性獨特の性情を觀察して、其處に根本的の意義を推考したものでなければならぬ。

果して然らば松崎君の『淪落の女』は、勿論此要求の總てに合うものではないが、弱い女子が陷り易い墮落のプロセスを寫し、社會が如何に之を遇するかを語り、一部の男子が是等女性の爲めにどんなに動かされて居るかを述べたあたり、女性問題の社會的方面を研究する學徒に對し、鮮らぬ貢献をなしたものと云ふべきだ。君が僕に宛てられた「お小夜」の一節で、「女子敎育家も斯う云ふ問題について、何時迄も素知らぬ顏の門外漢で過しては居られないと思ふ」と云はれたが、實際女性の凡てを知らずに賢母良妻を叫むだところで、所謂通り一遍の先生にはなれるが、眞に徹底した指導誘掖は難しいと考へる。されば云つて敎育家自身が其巷に足を向けることは、種々なる點から故障が多い。此時に際して著者の通信の如きは、少くとも女性問題の研究に忠なる人々にとつて、感謝して受取るべき好個の資料である。

今回君が是を再訂して一書とさるゝに際し、僕に命ぜらるるに序を以てせらるゝ、こゝに感想の一端を述べて其責に代へることとした。

ひの女

四、さまよひの女

—此の一篇を基督教牧師綱島佳吉氏に呈す—

はしがき

一、東京朝日新聞記者松崎天民が、長い夜勤係の仕事から解放されて、久し振りに山水放浪の旅路に上つたのは、明治四十四年六月中旬のことであつた。

二、彼が今度の旅行は、東京から一日程の近縣各地に散在する、いろ〳〵の避暑地を訪問して、面白い通信を書く事であつた。山も好し海も佳し、十日間に歩かれるだけ歩いて、紀行とも付かず、案内

記とも付かぬ文章を、旅の先々から送るのが、其の任せられた仕事であつた。

三、午前一時―二時頃まで宿直して、情死や殺人の新聞を編輯して居た彼は、此の旅行を何んなに喜んだであらう。暗きに囚はれて居たものが、明るきに放たれた愉悦の情を以て、彼は…日未明に、十日の旅路に就いた。

四、萬年筆に原稿紙、封筒、切手、手巾、カラー、「唐詩選」、「白氏文集」、「避暑地案内」などを詰め込んだ小い鞄を抱へて、四谷停車場のプラットホームに立つた時、彼は半歳振りに、樂しい旅客の心持を味はつた。

五、鼠色薄メルトンの背廣に、荒い鬼編の麥稈帽、深ゴムの赤靴に

細卷の洋傘といふ扮裝で、信州行の汽車に乘つた時、彼は凡ての桎梏から脱れた樣な氣持になつて、何とは無しに安心して、ヤレ〳〵と思つた。

六、一等室と仕切つた舊式の二等室の中で、彼は先づ今度の旅程を考へた。第一日は上諏訪に立寄つて長野泊、第二日は輕井澤を經て高崎泊、第三日は伊香保から前橋に出て、第四日は日光泊、第五日は宇都宮を經て水戸泊、第六日は平磯から祝町を通つて大洗泊、第七日は助川から霞ヶ浦に近い土浦に泊り、第八日は千葉から一の宮を經て大原泊、九日は大原から外房州を急行して、北條か舘山に着かうといふ豫定。

七、のんきな旅に似て、決してのんきならず、隨分あはたゞしい新

聞記者的旅行だと思ひながら、それでも此の旅中の遭遇には、幾多の雑報があらう、詩があらう、小説があらうと、彼は何となく心の躍るを覺えた。そして未だ見ぬ山の容や水の態、其の日その日に換つて行く旅宿の様などを、いろ〳〵と思ひ浮べて見た。

八、題目を極めてからで無いと、内容の記事に着手し得ない癖のある彼は、先づ新聞社に送る通信の題名を、「避暑地探訪記」と附けて、榜標運だけは、その日その日の土地に因んだものを附ける事にした。これと同時に、東京の宅に留守してゐる最愛の妻にも、一日一信を送ることに極めた。

九、夫婦になつてから十一年、三人の男の子まで擧げた妻には、並大抵ならぬ苦勞を掛けて居る。何時か機會があつたなら、感謝の意

を表しやうと思つて居たが、今度の旅行は絶好の機會である。旅から旅への宿屋〳〵で、見聞なり所感なりを、一日に一度は必ず書かうと、彼は汽車の中で考へた。

十、新聞の通信を一段半以上も書く上に、妻への手紙は大事業である。然し、書かう、有の儘を書かう、十日の旅路に接觸する女の上に就いても、欺かず僞らず書かうと決心した。そして、何でも宜い書いて置きさへすれば、此の人生を眺め、此の世相を觀る上に於いても、何かの備忘錄にならうと考へた。——汽車は八王子を出て、不愉快なトシネルを、既に四つ過ぎた頃——。

一、政治文學を語る女

新聞社への通信を書かぬ前に、此の手紙を書く。今日は上諏訪に寄つて、木曾福島の材料などを貰つて、夜遅く長野に着いた。停車場には、桐生悠々君が出迎ひに來られて居て、一所に車を連ねて、今こゝへ落着いた所である。暑くて草臥れもした、閉口もした。

今朝出發する時、シャツとズボン下が小さいと云つて、怒り散らしたのが氣になる。たとへ短い十日の間でも、旅へ出て行く者が、留守の人に怒つて出ると云ふ事は、氣持の好いものでは無い。「シャツもズボン下も小さくはないのです、貴郎が肥満たのが惡いのです」と云つたものだから、「肥満る樣なものをなぜ食はせる」と、ツイ腹が立つて、

香水の瓶を打割つた。お隣の前田さん——京橋署長前田警視の宅——では、能く癇癪を起す男だと云つて、笑はれた事だと思ふ。お前も善く無かつたが、私の方も善くは無かつた。

社の旅費規定が二等だから、此所まで二等で遣つて來たが、凡そ世の中に汽車の二等客ほど、氣に食はぬものは無い。他人の顏ばかりジロ〳〵見て、己はすまして納り返つて居る。先方が見たら此方も生意氣な奴位に見る樣が、こんな事なら一等に乘れば好かつた。「歩行」と「空腹」とを、人生の最大苦痛に感じて居る私は、今日も汽車中で食つた、食つた。八王子でお鮨を二箱、甲府で上辨を二個、夏密柑が二個にサイダーが四本、敷島は三袋空になつた。そして上諏訪でも宿屋へ一寸寄つて、ビールを一本と飯を六七杯食つた。本を讀むのは面倒だ

し、話相手はなし、半日以上も汽車の中で過ごすのは、大飯でも食つて、睡む氣を誘つて、コクリ〳〵と遣るに限る。船の中か人力車の上ならば、大きな聲で、詩でも吟じて居られるが、二等室では、好きな雲入道も唸れなつた。

桐生さんだけは、今—午前一時—歸つたけれど、私は今夜こゝで寢る事にした。遲ひから三味線を彈かなかつたけれど、長野の藝妓が三人、左右から涼しい風を送つてくれた。衣服や姿態は、澁谷藝妓位のものであるが、容色の好い若いのも居たし、話題の豐富な年增も居た。東京では新聞記者だと云ふと、決して好い顏をせぬものだが、長野の藝妓は新聞も了解して居るし、記者その人をも正當に理解して居るらしい。山路愛山先生とか、茅原華山先生とか、久津見蕨村先生とか、

結城禮一郎先生とか、曾て一度、こゝで新聞記者たりし人々は、今も尙、藝妓仲間の話題に上つて居る。危なくはあるが、政治も談ずるし、紅葉、鏡花、花袋、藤村の文學を語る妓も居る。桐生さんが、こんなのばかり選拔して、見せてくれたのかも知れないが、面白いと思つた。中に一人お前と同じ名のが居たけれど、三十六歳だから、心配しなくても宜しい。唯、百圓足らずの世帶を持つて、美しい衣服も着られず、避暑旅行も出來ないのが好いか。或は美しい衣服を着て、美味い物を食つて、浮いて騷いで世を暮す藝妓の方が好いか。私はお前の爲めにも考へた、世の女達の爲めにも考へた。

大阪のお玉さんに似た女も居た。お玉さんは長い間の妾生活に倦いて、藝妓になりたいと云つて居たさうなが、其のお玉さんが、長野へ

流れて來て、藝妓になつたのかと思ふほど、顔も姿も能く似て居た。越後の生れださうで、新潟節が巧いのだけれど、箱が無いので聽かれなかつた。色が白くて髪が濃くて、痩せて背の高いものごしで、靜かに話す工合がしんみりして居た。喜多村緑郎の舞臺顔よりも、試演會で見た女優初瀬浪子の型で、小説ならば泉鏡花が、好んで描きさうな女であつたが、名は何と云つたか聞きもらした。

長野へ來ても暑い。哲郎、達郎、俊郎、三人とも寢冷をさすな。新聞に出る私の通信は、毎日〳〵切拔いて、書棚の抽斗の中に藏つて置いて呉れ。洋服屋が來たら、月末には歸ると、唯それだけ云ふべし。明日は高崎の宿で、何か書いて送らう。（長野にて）

二、一夜泊の客に惚れ

今朝の「信濃毎日新聞」に、四號標題で、「夏目漱石氏の來遊」と書いてある傍に、同じ四號標題で、「松崎天民氏の來長」と出て居たには驚いた。昨夜の宿を出て、信毎社に行く途中で、其の夏目漱石氏にバッタリ出逢つた時には、何んだか知ら少からず面食つた。

私は一人旅だけれど、夏目さんは奥樣と同道であつた。「この方が社の松崎天民君」と、奥樣に紹介された時は、ヘドモドして挨拶した。「昨夜は何所にお泊りでした」と問はれた時には、汗を流して「あの桐生君と……」と答へたのみ。これで、私が昨夜の手紙を書いた所が、普通の宿屋で無い事だけは判つたらう。十時頃まで信毎社に居て、十一

時頃停車場前の宿屋で朝飯を食つて、輕井澤を雨の夕暮に見て、今、高崎停車場前の宿屋に着いた。通信は長野で一回、こゝで二回書いたから、これから酒を飲んで、寢るだけのことだ。

社の薄井君と電話したら、東京は大暴風雨で、大分被害があつたさうな。青山方面は何うか、南町五丁目は何うかと聞いたが、異狀が無いので安心した。上半期の賞與金も、昨日渡されたさうな。急に入用なら机の抽斗から、水晶の印を持つて行つて、薄井さんか渡邊さんに受取つて貰ふべし。去年の暮と同じだと云ふから、八十圓はお前に上げます、殘部は其の儘預つて置いてくれ。高崎は日暮頃から風雨になつて、此の三階の上等室も、メキ〳〵云つて心持が惡いけれど、宅さへ異狀なくば安心だ。十六七の女中が二人、赤い腰卷を出して、バタ

〳〵と雨戸を閉めながら、何を唄ふかと聞いて居ると、「一夜泊りの兵隊さんに惚れて、連れちや行かれぬ泣き別れ」一人が唄ふと、一人が「はアちんかいなア」と調子を取る。十六七でもこれだから、宿屋の女中なんか、實に問題である。

同じ宿屋でも、停車場前の宿屋は、客の出入が繁くて、あはたゞしいだけに、少しも落着いた所が無い。一夜泊が最も多くて、長くも三日と滯在する人は無い樣である。宿屋の方でも、宿泊人その者の人柄なんか、頭から氣を付けては居ず、唯、金を澤山支拂ふ人が、上等の客として羽振りを利かせる。私は驛員の案内で投宿したものだから、何處かの官員さん位に思つて、三階の一等室に通したのであらう。番頭が宿帳を記けに來ても、ヘイ〳〵と敬意の無い頭の下げ樣をする。

女中が給仕に來ても、人の顏ばかりジロ〳〵見て、妙にオド〳〵する。給仕に來た女は、何でも前橋在の者ださうで、高等小學校の二年生であつたと云ふ事を、せめてもの心休めにして居る樣な口振りであつた。

「女學校なんか上つても、家庭の何には駄目だつて、家の伯母さんがさう云つて居ましたわ」とて、他を蔑すむ樣な厭な眼つきをした。女學生と云ふことと、宿屋の女中と云ふ事とを、此の娘は差別無しに見て居るのであらう。小さい肩揚げをして居るけれど、歩く度に裙が亂れて、赤モスリンのおこしの中から、太股を出す所など見ると、此の女中も最う、男の味を知つて居る一人であらう。

旅の心をしみじみと味はうとするには、上等の宿屋に泊るよりも、停車場前か何かの、中等に泊る方が宜い。帳場へ通ずる電鈴はあつて

も、それは唯體裁ばかりで幾ら押してもチリンとも鳴らない、と云つた風の所に、田舍宿屋の特色がある。お刺身やら、吸物やら、鹽燒やら、オムレツやら、所謂二の膳付きで出たけれど、何一つとして美味く無い。麥飯に茄子の漬物、宅に居て茶漬をさら〳〵遣る方が、何んなに美味いか知れない。女中は膳を下げて行く時、「旦那さんの眼鏡はまあなんて厚いのでせう」と驚いて居た。

東京を出てより二日目に過ぎないけれど、今日は大分、旅らしい氣持になつた。斯うして一生涯、旅から旅を放浪するのも、面白い樣に思ふ。東京に居る私の有樣が、他人の事でも見る樣に浮んで來る。今度の手紙は、私の歸るまで、凡て大切に保存の事。（高崎にて）

三、落藉されて歸る所

高崎から澁川までも電車、澁川から伊香保までも、山坂を登る電車、今日は終日電車に乘つて、日暮れ頃前橋の宿に着いた。宿は白井屋と云つて、一二度泊つた事のある家だけれど、給仕の女中も、風呂場の三助も、二年前の顏馴染は、最う一人も居なつた。

前橋は其の昔、私が未だ十二三歳の頃、母上が妹を連れて、來て居られた所である。國民新聞に居た頃、縣會の政友非政友騷ぎの時に一度と、朝日に入つてから、共進會の棟上式の折に一度と、來た事のある土地だけに、何となく懷しい。前橋に來る毎に、何時も此の宿で、代議士細野次郎君と、云ひ合はした樣に落合ふが、今夜も珍らしく邂

逅した。「何時も此處で逢ひますね」と云ふと、「何うも不思議ですね」と、細野さんも笑つて居られた。何でも無い事の樣だけれど、斯うした遭遇が、旅の心の哀れを誘ふものである。

伊香保では、知合の木暮武太夫さんに逢つて、其の所有の公園地やら、建てかけの貸別莊やらに案内された。社の通信員にも逢つて、古い温泉場の過去と現在を、相應の興味を以て聞いた。榛名湖への登り口へも行つたし、湯宿の表裏を通つて、蒼白い顏をした湯治客も見た。山の上の湯の湧く町、お前や子供達と一所ならば、こんな所へ來なくても、修禪寺の方が宜い、鹽原の方が好いと思つた。それにしても、常に米鹽の苦勞のみ掛けて、芝居と云ふ芝居へも連れて行かず、避暑と云ふ避暑もせず、温泉場と云ふ温泉場へも一所に行き得ない事を、

何となく腑甲斐無い樣に思ふ。女は人の妻となつて、子を生み子を育て、飯を炊いたり、洗濯をしたりして、一生を過ごすだけの者で無いと、平生から主張して居る丈けに、今日、伊香保の山氣に浴して、殊にお前に對して恥づること深い。

昨日の暴風雨で、前橋への電車は不通となり、歸りも澁川から電車で高崎へ出た。いろ〳〵の小虫が飛び入る田圃道の電車の中、乘合は百姓か、役場員か、土木吏か、土方か、土地の親分らしい者ばかり。その中に唯一人、水際立つて四邊を拂ふ、二十三四歳の女が居た。連の男は太い白縮緬の兵兒帶に、黃色の勝つた金鎖の大きいのをからませた、色の黑い背の高い三十恰好の親分で、二人は席が空いて居るのに兩側に向ひ合つて腰を掛けた。澁川から乘つて、高崎へ中程の小さ

な町で下車したが、二人が居なくなると、電車内は彼等の取沙汰で持切つた。何でも其の女と云ふのは、高崎在の大百姓の二番娘ださうなが、十七八の頃からお尻が輕くて、誰れ彼れの差別なく浮き名を立てられた。果は生れた村を飛び出して、字都宮では酌婦になつたり、日光では藝妓になつたり、水戸、結城、古河と方々を流れ渡つた後、澁川の町へ戻つて來て、こゝでも左裙を取つて出た。「色が黑くて、大い顏で、愛嬌の無い妓だんべや」と一人が云ふと、「衣服の柄や着こなしは爭はれねえもんだよ」と一人が云ふ、「あん生畜したゝか者だアね」と、又他の一人が憎く相に唾を吐いた。

連の男と云ふのは、女の實の父に賴まれて、百何十圓かの前借を立替へて、女を抱へ主から受取り、その實家へ送つて行く所であつたさ

うな。紅白粉の化粧の仕方は、東京の女に及ぶべくも無いが、鬢の香も袖の匂も、田舎にしては垢抜けがして、斯うした田圃の電車の中では、一際眼立つて好く見えた。前髪は縮れて居るし、痩せ形の高い方で、利かぬ氣の口許にこそ、好き嫌いの激しい性質を現はして居れ、その濃い眉と丸い眼とには、男の心を蕩かすに充分な、力と霑ひとを見せて居た。一言にして盡せば、曰く浮氣者である。

地方を旅行して居れば、能くこんな類の女を見受ける。前借を拂つて貰つて、父母の許へ歸つた所で、それが何時まで續くことか。こんな女の行末は、何う始末をして宜いものやら、神樣も並大抵のお骨折ではあるまい。通信員が來たから、これにて擱筆。（前橋にて）

四、其の一顰一笑の裏

日光に來た。材料を得て、直ぐ引返す豫定であつたが、足尾暴動事件や谷中村事件で、數年來知合になつて居る、日光警察署長に引き止められて、今夜は小西別館の三階で、穩かな夢を見る事になつた。哲、達、俊へ土産として、日光羮羹を澤山送つて置いた。

六月の下旬、東京は暑くて堪らないのに、日光の今夜は殊に涼しい。町を歩くにも、浴衣の上に褞衣を重ねて、汗が少しも出ないほど、心地好い冷氣を感ずる。今夜は通信員と一所に、藝妓屋兼料理屋へ登つて、初めて日光の藝妓を見た。足尾銅山暴動事件の折、雪の細尾峠を越して、十日振りに此地まで歸つて來て、初めて人心地を感じた時に

は、藝妓を見るなどの勇氣も出なかつたが、今夜は初めて日光の藝妓を見ることが出來た。日光の藝妓は、數年前から、見んとして見る能はざりし所のもの、今夜の得意察すべし。

日光の藝妓は、矢張り田舍の藝妓である。「日光の」が、「栃木の」と變つても、「田舍藝妓」たるに於て、何所までも共通して居る。唯、私等の登つか家は、藝妓屋でありながら料理屋然たり、料理屋でありながら藝妓屋然たる事に依つて、他とは少し趣致を異にして居た。こゝの藝妓は、最初先づ女中として應接し、着換へをしてから、藝妓となつて出現した。衣服も粗末だし、容色だつて紡績工女然たるも居れば、看護婦然たるも居り、これぞと云つて別に感興を惹くに足るものは無い。いろ〳〵話をして居る間に、私は彼等を

藝妓として容認せねばならぬ旅客の心を悲しみ、また、藝妓たりと自負して居る彼等の心を憐んだ。土地が神境とか靈域とか云つて立つて居る所だけに、一層この種の藝妓が悲慘にも見え、亦氣の毒にも思はれ、淺間しくも思はれるのである。

彼等は殆ど口癖の樣に、警察が八釜しいとか、宇都宮の新聞が五月蠅いとか云つて、操を賣る事を拒む氣の擧動をしたが、其の實は正眞正銘の賣春婦なのである。「東京にはこんな歌が流行つて」とか、「帝劇を見たいわねえ」とか、「妾、東京へ行つて、踊のお稽古をしたい」などと、藝妓らしい事を言つたけれど、彼等は藝に依つて立行かれず、春を賣つて生活して居る。都會と地方とを問はず、凡て藝妓が操を賣ると云ふ事は、供給者も需用者も、また仲介の取引商人も、暗默の間

に當然の事として、何時とは無しに今日の大勢をなすに至つた。彼等の市場はこれがために榮え、彼等の收入はこれがために增加して居る今日、別に四の五と云ふ可き程の問題でないが、然し考へて見れば、彼等は痛ましい一種の犧牲者である。海山千年の齡とつた女は、最う何も彼も自覺して居るので、相手にそれほどの悲慘さを想はせないが、藝妓になつて一二年、美しい衣服が着られるのを、無上の喜悅にして居る樣な輩は、その行末が長いだけに、見て居ても可愛さうである。自分の境涯を自覺して居ないだけに、その一顰一笑の裏には、暗い人生の影が潛んで居るやう。

二時間ほど飲んで、小西の三階に引き揚げると、警察署長やら、宿の主人やらが來て、夜遲くまで語り合つた。斯うして寢轉んで居ると、

裏の山から流れ落つる竹筧の水音や、樹立の風に戰ぐ音が聞えて、何とも云へぬ好い氣持である。子供三人にお前と五人連で來ても、一日の費用十圓あれば足りやう。何時と堅い約束は出來ないが、秋にでもなつたら、二三日泊で來たいと思ふ。一家打揃つて宿屋の飯を食ふのも、平生の生活から飛び放れて面白い。殊に子供達のためには、時折さうした旅行をするのが必要であり、有益であると思ふ。

それにしても、お互は幸福である。一人位あつても善さ相な女の子は生れず、三人とも壯健な男の子である事は、何と云ふ仕合せであらう。何んなに出來損つた所で、松崎の家から、「藝妓」を出す氣遣ひが無いと云ふ事だけは、お互の誇であり光榮である。（日光にて）

五、凄惨な運命の縮圖

今日は午前中、日光と其の附近を歩いて、午後宇都宮へ寄つて、夕暮れ水戸に着いた。特置員の東君を訪ねると、某の料理屋で小宴を開いて居るとのこと。私も招かれて行つて見ると、いばらぎ新聞の主筆伊藤君、編輯長渡邊君も居て、旅の疲勞を忘れた。

あやめと云ふ美しい藝妓も居たし、吉原に居たといふ淺黑い中年增も居たし、磯節の巧い幇間も居た。日光や長野と異つて、萬事が大分東京に近く、藝妓の樣子なども地方的臭味が無く、料理も酒も相應に美味かつた。殊にいばらぎの編輯長渡邊君は、私と同じ岡山縣美作國眞庭郡の人で、幼い頃には其の令弟と遊び仲間であつた因緣もあるので、旅に行つた樣な氣持はしなかつた。渡邊君が私と同じ浪花節黨で、桃中軒雲右衞門の信者であると判つてからは、座も一層面白くなつて、誰も彼も精限り唄つたり唸つたりした。

汽車中では女を見ず、唯、水戸にあやめと云ふ美しい妓が居る、と云ふ事だけが、今日の獲物、今日の發見であつた。常陸は常陸山の出た所であり、菊地幽芳、相島虚吼、鹿島櫻卷、永井鳳仙、蛯原詠二など、面識ある人々の故郷であると思ふと、何となく懷しさを覺える。昨日までは山ばかり見て歩いて居たが、明日からは愈々海の方へ廻り、「己が罪」で其の名を知つた平磯の海岸、磯節で夢にのみ見て居た祝町大洗、湊へ行くのかと思ふと、何となく心が落ち着かない。殊に大洗には、日本に於ける唯一人の磯節の名手、按摩の安中が居る筈である。

久し振に彼と逢つて、寄せては返す波の音を相方にしながら、其の幽艶悲痛な唄の聲が聞かれるかと思ふと、そゞろに胸の湧き立つを覺える。磯節の本場たる大洗の海岸で磯節を聞かん事は、私が十年來の宿志であつたが、愈々その日その時が近づいた。

今夜は此の停車場に近い宿屋で寢る。風呂に入つて、糊の堅い浴衣に着換へて、枕頭に冷へたビールを置いて、斯う寢そべりながら、今日まで逢つたいろ〳〵の女の上を想ふ。個々別々で有るべき筈だのに、長野の藝妓も、高崎の女中も、電車中の女も、日光の藝妓も、水戸の女も、皆一つになつて、同じ人間の樣に浮んで來る。顏も、言葉も、衣服も、態度も、五人には五人のそれ〴〵異つた色彩があつたに、それが皆一つになつて、女一人の生涯を物語る樣な氣がする。その一人

〳〵の過去なり、現在なり未來なりが、五人の上に時を同じうして現はれたとも見られて、一種凄慘な運命の縮圖に對する樣な、冷たい氣持を感ぜずには居られぬ。あゝ「さまよひ」の旅に見る「さまよひ」の女の一生、こんなのは山にも居る、海にも居る、都にも居る、村にも居る。そして皆、判で押した樣に、同じ道を歩いて、同じ路傍に倒れ、同じ墓場の土に化り行くのかと思ふと、何とも云へぬ胸苦しさを覺える。宗教が何うとか、法律が何うとか、教育が何うとか、八釜しく詮議立てをした所で、「凄慘なる運命の縮圖」とは、昔も今も行末も、未來永劫まで沒交渉であらう。

按摩を呼んだら女按摩が來た。三十を越して間も無い年配だが、眼が見ゐぬので何となく淋しい。痩せた手端に力を籠めて擦りながら、

水戸は梅の頃が好いとか、大洗は盛の夏が好いとか、いろ〳〵と能く話す。「何時頃から盲目になつたのか」と尋ねると、「これでもね旦那、若い時は、男五人持ちや五々二十五日、後の五日は誰と寢よう、なんかと、好い聲をして唄つた事もありますが、餘りお尻が輕かつたので天罰ですよ、梅毒でねえ」と嘲ける樣に云つて笑ふ。女按摩も矢張り田舍酌婦のなれの果を具體化した一人であつた。

今夜は眼が冴へて、何う云ふものか寢付かれない。こんな晩は、文章が能く書けるものだが、最う此の上書く氣にもならぬ。東京を出て五日目に過ぎぬけれど、ポッ〳〵東京が戀しくなつた。何處からも手紙は來て居ないか、俊坊に破らせぬやう御要心。（水戸にて）

六、哀れ深い波の磯節

水戸から湊まで汽船で下り、湊から平磯の方は人力車で廻り、祝町から磯濱の方も見て、大洗の金波樓へ落着いた。水戸の東君から紹介の電報があつたとかで、警察署長が出迎いに來たり、巡査が二人で案内したりして、今日の視察は、頗る便利で頗る振つて居た。

濃い髭を生した人柄の好い巡査と二人連れで、大洗神社の松並樹の中に立つた時、私は最う死んでも好いと思つた。松吹く風の涼しい所、大平洋の怒濤寄せては返す眺めの美しさ、砂白い濱邊に飛ぶは何の鳥ぞ。山には山の景趣があるけれど、海の大觀は又格別、こんな所に別莊の一つも有つて居れば、富貴榮達なんかは何うでも宜い樣な氣持に

なる。「磯は戀しや大洗樣の……松が見えますほの〳〵と……」その大洗神社の境内に立つて居るのかと思ふと、涙がこぼれる程嬉しい。今日は日本晴の好天氣で、一片の浮雲も無かつた。

金波樓の三階は、吹き倒されるかと思ふほど涼しい。こゝで原稿を二回分書いて、風呂に入つて、水貝と海老の鬼がら燒で、冷たいビールを飲む心地好さは、千金を以てするも購ひ難からう。未だ避暑客は一人も來て居ないが、水戸邊から藝妓を連れた一組が二室隔てた隣で、キャッ〳〵と騷ぐのが、手に取る樣に聞える。夏の盛りになると、避暑時分に限つて出稼ぎする女中が、一軒に十四五人も來て、隨分賑やかになると云ふが、今は三階も二階も、大方は雨戸を閉めて居て、唯ガタ〳〵と風に搖れる音が激しい。案内して呉れた巡査に「一所に晩

飯を食べませう」と云ふと、「いや私は公務がありますから、これで失禮いたします、御用がありましたら、何うぞ使でも寄こして下さい」と云つて、止めるのも聞かずに歸つて了つた。袖擦り合ふも他生の縁、この良巡査の上に祝福あれ。

隣の室で磯節が聞える。「沖の鴎に潮時問へば…私や立つ鳥波に聞け……」、一昨年の夏、常陸山が筑波山に登つた時、一行に加はつて、音頭を取つた安中の聲である。明日は愈々登山と云ふ前の夜、筑波の山麓で痛飲した時、好い聲で磯節を唄つた、その安中の聲に相違ない。あゝ安中、兩眼盲いて僅に明暗の差別が分るだけの安中よ、私が大洗に來たのは、お前が居るからである、お前に逢はんが爲めである。お前の磯節を聞かんが爲めである。襟が黒くなつた、洗晒しの浴衣の上

に、常陸山から貰つたと云ふ黒縮緬の羽織を着て、首を左に傾けながら、手拍子取つて唄ふ安中の磯節は、安中にして初めて唄ふを得る獨得の哀調である。筑波で聞いてさへ心を動かしたものを、唄の本場の大洗で聞いては、何んとなく胸の迫るを覺える。安中はこの隣の室に自分の唄の渇仰者が、涙を流して聞いて居るとは知らず、折々疳高い聲で客を揶揄いながら、「舟は千來る萬來る中に…私の待つ舟未だ來ない……」とか、「磯で下り松湊の女松…中の祝町は男まつ……」とか唄つては、さも面白さうに手拍子を打つて居る。沖の方は、黄昏れて、最う洋燈の點く頃になつた。

安中は隣の室から出て、私の室の外を默つて通り拔けやうとした。

「おい、安中さんぢやないか、お入りよ、松崎だ、常陸山と一所に筑波

山に登つた……」と聲を掛けると、安中は「へッ常陸山、筑波山、松崎さん、あア彼の新聞社の、朝日の、松崎先生ですか。これは何うもお珍しい、何時こゝへ、へイ、これは何うも、お珍しい、成る程、松崎さん、へイ」笑ひながら入つて來た。「君の磯節が聞きたくてね」と云ふと、「何うもこれは、さう〳〵、貴君は磯節がお好きの樣でしたねえ」と、懷しさうに夫れからそれへと話し初めた。

祝町から呼べば、藝妓も來るさうであるが、今夜は安中と二人差向いで、心ゆくばかり磯節を聞いた。これは少いがと云つて、二圓遣つたら、これは粗末ですがと云つて、鯛味噌の罐詰をくれた。安中にも小學校へ行く樣な子が、三四人ある相である。（大洗にて）

七、醜惡猛烈な腐肉團

助川の東曉館で晝飯を食つて、霞ケ浦の汽船發着所まで來ると、銚子廻りしか最う出ないと云ふ。少し早いが今夜は土浦に泊つて、明日は汽車で千葉へ出る事にしやうと、今この宿屋へ落着いた。常陸山と筑波山に登つた時、一度泊つた事のある宿屋である。

飯を食つて居ても、原稿を書いて居ても、小虫が澤山落ちて來る。宿の女中は霞ケ浦の虫ですと云ふが、何にしても堪つたもので無い。町には新俳優櫻井猛夫と云ふのがかゝつて、金色夜叉を演つて居るさうで、隣室の縣吏員は女中を連れて見物に出た。土浦には澤山の藝妓も居るし、多くの達磨も居るさうで、料理屋の女中でも宿屋の女中で

も、賣笑婦ならぬは無いと云ふ。此の宿屋の女中も、白粉をベタ〳〵付けて、安香水の匂をプン〳〵させて、赤い蹴出しをヒラ付かせて居る所を見ると、何うも唯の女中で無いらしい。

今夜は何うしたものか、非常に腹痛がして苦しんだ。按腹する者を呼んでくれと言ふと、「そんな者呼ばなくても、妾がもんで上げませう」と云つて、女中が一人ならず二人三人と遣つて來る。そして「酒を召上がると治りますよ」とか、「元氣を出して、はい、ぎなさいましな」などと云ふ。二十七八の束髮した金齒も居るし、二十三四の肥滿つた銀杏返しも居るし、十七八の廂髮も居る。凡てだらし無い身の扮裝で、男の心をそゝる樣な身の態度をする。白粉と髮油と香水の他に、斯うした女に特有な一種の匂を以て、相手の男を刺戟しやうとする。「隣の

方、お床敷いても宜い……」と一人が云ふと、「おとこは入らない、おなごか御入用かも知れないよ」と、他の一人が云ふ。こんな事を客の前で平氣で云ひ得る程に、この邊の宿屋の女中は、酌婦化し、賣淫婦化し、私娼化して居るのである。

土浦と云ふ土地が、凡て斯うと云ふのではあるまいが、兎に角猛烈な女達である。最初の間は二人なり三人なり來て、何かとチャホヤ云つて居るが、お客の眼色顔付きを見て、ははア、何々さんに御氣があるなと睨むと、他の二人はせつせと出て行つて、お客の氣のあるらしい女一人だけを殘す。殘された女は又女で好い氣になつて、今までとはより露骨に、より猛烈に、思の情をそゝらうとする。甚だしきに至つては、「妾最うこゝを動かない、今夜は、貴郎の看護婦さんなんです、

妾今夜だけは、貴郎の思ふ存分になつてよ」などゝ膝をくづす。固より此方が最初から眞面目で、戯談口一つ叩かないだけの威儀を持して居れば、女は乘ずる機會が無くて引込むであらうが、ビールの一杯も飲んで、「姉さん何うだい、こゝには美しい藝妓が居るかね」位の事を云ふと、大概の男を男と思はない彼等は、待つてましたとばかりに、有ゆる媚を呈し樣とする。さうして得た所の一圓なり二圓なりの金を、香水なり半襟なり片側帶なりに代へて、女としての榮を飾らうとする。斯うした宿屋と斯うした女中は、東京にもあるけれど、殊に地方の小さな町に多い樣に思ふ。

醜惡猛烈な腐肉團、と云ふのが彼等の事であらう。宿屋の女に檢黴を强るのは怪しからぬとか、善良な女性を私娼扱ひにするなぞと云つ

て、憤慨する人々もある樣子だか、此の分なら檢徵、檢擧は愚なこと、何んな苛酷なことをしても、宜さ相に思はれる。唯、警察力位を以て して、其の存在を絶滅し得るか何うか、これは疑ふまでもなく不可能である。法律でも、敎育でも、宗敎でも、人間本能の恐るべき力を輕視して居る間は、この問題を根本から解決すること、到底思ひも寄らない。あゝ今夜は、頭が痛くて、何事も腹立たしい。

隣の部屋では、縣廳の役人と廂髪とが、キャッ〳〵云つて騷いで居たが、やがて小さく呻く樣な聲が聞え出した。こんな宿へ泊るではなかつたに、取返しの付かぬことをしたものだ。松風の聲、怒濤の音、風情あり、感興あつた大洗の一夜が想ひ起される。（土浦にて）

八、男女混浴の自然觀

霞ケ浦を汽船で縱斷して、佐原へ出る豫定であつたが、時間の都合で千葉までも、千葉から一の宮を經て大原までも、凡て汽車で急行した。夏の眞晝の汽車の旅は、決して愉快なもので無いが、汽船の中で小一日を暮すのも、餘り氣持の好いものではあるまい。

一の宮は氣に入つた。親切な驛長に就いて、避暑の事をいろ〳〵聞いたが、若し御家族一所にお出になるならば、然るべき農家を周旋しませうと云つて居た。野菜物も豐富だし、海魚はお手の物、斯うして世人のために、避暑地を紹介するばかりが能では無い、一つ松崎の一家も奮發して、今年は一の宮で暮らさうではないか。新聞社への通勤